

佐野左衛門 常世



高崎市教育委員会発行



K2

圖書集成

卷之三

録中 録式 録序

録口 録式 録序

佐野源左衛門常世は、鎌倉武士の典型として武士道に徹したことで世に知られているが、常世が果して実在の人物であつたであらうか、それとも謡曲『鉢木』の戯作的仮空の人物に過ぎないかは、従来古文書の文献によつても、また口伝によつても全く判定に苦しむところであつた。従来幾多の史家が研究し、終止符がつけられず今日に至つてゐるものである。しかし常世の研究は古文書が少ない関係もあつて容易ではないが、今回『鉢木』大舞台の本家である上州佐野の地元として、この事蹟をより明かにし以つて将来の研究の資料にしたいという目的のために各方面の文献、口碑をあさつて編集したのがこの『佐野源左衛門常世』である。

この書刊行の大きな目的は、単に古文書の記録を集めるといふことになしに、一つには常世の美しい人情が、七百余年を経た今日でも、そのまゝに青少年指導にも大きに役立つといふことであつて、例えその事柄が仮空の戯作としても、或は実説としても、その価値は『鉢木』に盛られた古武士の精神であつて、今の世に伝えて立派であり、これからの処世にも通ずることであるので、この出版によつて日にうすれ行く人情を少しでも修正出来、よつて青少年指導にも大きく役立つならば、これに越した喜びはない。

こゝに刊行に際し各方面から寄せられた御厚意と資料を賜つた各位に対し深謝するものである。

高崎市教育長 日中 沢 宗 弥

田島武夫氏寄贈

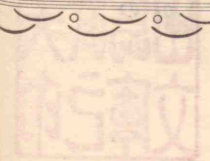


佐野源左衛門常世目次

元 宗 梅

表紙	峯 昭示
編集者	根岸省三
序	教育長 中沢宗弥 卷頭
写真並凸版	
A・常世神社全景	九頁
B・中仙道高崎宿地図	二頁
C・常世愛用と伝えられる茶釜	三頁
D・墓地と位牌	三頁
E・上佐野町の周辺図(凸版)	五頁
F・姫路の常世の墓碑	六頁
一 謡曲『鉢木』の常世	一頁
文献に現われた常世	九頁
郷土史から見た鉢木	一五頁
堀口家にある系図	一四頁
越中に居たか源左衛門	三五頁

田記のついで



常世安養寺を焼払う	三九頁
常世の祖先	三三頁
墓地が葛生町にある	三六頁
願成寺の文献	三六頁
『船橋』も『鉢木』も栃木という	四三頁
田原族譜から見た常世	四七頁
観阿弥の脚色した戯曲	四九頁
劇作家の脚色ともいう	五三頁
常世は実在した	五七頁
鎌倉街道の文化	六三頁
加賀に於ける文献	六五頁
姫路市と岐阜にも子孫	六九頁
『鉢木』の研究家	七三頁
年 代 表	七三頁
編集後記	七六頁

謡曲『鉢木』の常世

謡曲『鉢木』で有名になつた鎌倉武士佐野源左衛門常世は果して実在の人物であつたであろうか七百余年の謎を残した『鉢木』は勿論能狂言作家の脚色ではあるが、史実の上でも全く仮空の人物であろうと伝えることは、上野の佐野村（現高崎市下佐野町）にこれを確実化する記録がなく、たゞ口碑によつて言い伝えているだけで、一部史家の間にも伝説であると断定する者あるによる。鎌倉時代のもので残されている遺物、記録として興禅寺の大鐘（西暦一三〇三年）もうしない高崎市に於て『鉢木』も単なる伝説だとすれば、研究家のみならず、市民にも淋しいやるせないものがある。そこで従来はこの問題につき深く掘り下げて研究もして居らなかつたので『鉢木』を中心としてより深く広く事件を掘り下げて見たいと思つ先づこの謎をとくために、問題の謡曲『鉢木』から一歩踏み込んで見よう。それは源左衛門をめぐる出来ごとをまたよく知らない人々のためにも、常世の人となりをよくわしく述べる必要もあるから

である。

昭和五年九月十三日大同館書店発行野本米吉著作の『名作謡曲新釈』に『鉢木』も四番目狂言として作られたもので、四番目とは『現在物と言いたとえ歴史的の人物でも幽霊の形をとらず、現存している人物としてあらわされる。これには二種類あつて、源平時代の武士、義経、曾我兄弟等を題材とした所謂時代物と其の当時の世相を題材とした所謂世話物である……』とあり『鉢木』の梗概には……

鎌倉幕府の執権北条時頼（出家して最明寺入道という）民情視察の為、諸国を巡回して、上野の佐野源左衛門の宿に泊つた。折からの雪の夜の寒さに常世の秘蔵の鉢の木を焚き、且たとえ零落しても武士の自分を忘れぬと述べたので、後時頼がその志を試みる為鎌倉に諸国の武士を召集した所、果してその通りであつたので厚くその忠義を賞したという作である。事実を穿鑿するより我々はたゞ優美芳醇な物語に陶醉すればよい。

と断定し、その事柄の伝説であるか否かは既に問

序

佐野源左衛門常世は、鎌倉武士の典型として武士道に徹したことで世に知られているが、この常世が果して実在の人物であつたであろうか、それとも謡曲『鉢木』の戯作的仮空の人物にしか過ぎないかは、従来古文書の文献によつても、また口伝によつても全く判定に苦しむところで、従来幾多の史家が研究し、終止符がつけられず今日に至つていゝものである。しかし常世の研究は古文書が少ない関係もあつて容易ではないが、今回『鉢木』大舞台の本案である上州佐野の地元として、この事蹟をより明かにし以つて将来の研究の資料にしたいという目的のために各方面の文献、口碑をあさつて編集したのがこの『佐野源左衛門常世』である。

この書刊行の大きな目的は、単に古文書の記録を集めるといふことになしに、一つには常世の美しい人情が、七百余年を経た今日でも、そのまゝに青少年指導にも大きに役立つといふことであつて、例えその事柄が仮空の戯作としても、或は実説としても、その価値は『鉢木』に盛られた古武士の精神であつて、今の世に伝えて立派であり、これからの処世にも通ずることであるので、この出版によつて日にうすれ行く人情を少しでも修正出来、よつて青少年指導にも大きく役立つならば、これに越した喜びはない。

こゝに刊行に際し各方面から寄せられた御厚意と資料を賜つた各位に対し深謝するものである。

佐野源左衛門常世目次

一 表紙…………… 峯 昭示
一 編集者…………… 根岸省三
一 序…………… 教育長 中沢宗弥…………… 巻頭……………
一 写真並凸版
A・常世神社全景…………… 九頁
B・中仙道高崎宿地区…………… 二頁
C・常世愛用と伝えられる茶釜…………… 三頁
D・墓地と位牌…………… 三頁
E・上佐野町の周辺図(凸版)…………… 五頁
F・姫路の常世の墓碑…………… 六頁
一 謡曲『鉢木』の常世…………… 一頁
文献に現われた常世…………… 九頁
郷土史から見た鉢木…………… 一五頁
堀口家にある系図…………… 一四頁
越中に居たか源左衛門…………… 三五頁

常世安養寺を焼払う…………… 二九頁
常世の祖先…………… 三頁
墓地が葛生町にある…………… 三頁
願成寺の文献…………… 三六頁
『船橋』も『鉢木』も栃木という…………… 四三頁
田原族譜から見た常世…………… 四七頁
観阿弥の脚色した戯曲…………… 四九頁
劇作家の脚色ともいう…………… 五三頁
常世は実在した…………… 五七頁
鎌倉街道の文化…………… 六一頁
加賀に於ける文献…………… 六五頁
姫路市と岐阜にも子孫…………… 六九頁
『鉢木』の研究者…………… 七三頁
年 代 表…………… 七五頁
編 集 後 記…………… 七九頁

謡曲「鉢木」の常世

謡曲「鉢木」で有名になつた鎌倉武士佐野源左衛門常世は果して実在の人物であつたであろうか七百余年の謎を残した「鉢木」は勿論能狂言作家の脚色ではあるが、史実の上でも全く架空の人物であろうと伝えることは、上野の佐野村（現高崎市下佐野町）にこれを確実化する記録がなく、たゞ口碑によつて言い伝えているだけで、一部史家の間にも伝説であると断定する者あるによる。鎌倉時代のもので残されている遺物、記録として興禅寺の大鐘（西暦一三〇三年）もうしない高崎市に於て「鉢木」も単なる伝説だとすれば、研究家のみならず、市民にも淋しいやるせないものがある。そこで従来はこの問題につき深く掘り下げて研究もして居らなかつたので「鉢木」を中心としてより深く事件を掘り下げて見たいと思つ先づこの謎をとくために、問題の謡曲「鉢木」から一步踏み込んで見よう。それは源左衛門をめぐる出来ごとをまだよく知らない人々のためにも、常世の人となりをよくわしく述べる必要もあるから

である。

昭和五年九月十三日大同館書店發行野本米吉著作の『名作謡曲新釈』に「鉢木」も四番目狂言として作られたもので、四番目とは「現在物と言いたとえ歴史的の人物でも幽霊の形をとらず、現存している人物としてあらわされる。これには二種類あつて、源平時代の武士、義経、曾我兄弟等を題材とした所謂時代物と其の当時の世相を題材とした所謂世話物である……」とあり「鉢木」の梗概には……

鎌倉幕府の執権北条時頼（出家して最明寺入道という）民情視察の為、諸国を巡回して、上野の佐野源左衛門の宿に泊つた。折からの雪の夜の寒さに常世の秘蔵の鉢の木を焚き、且たとえ零落しても武士の本分を忘れぬと述べたので、後時頼がその志を試みる為鎌倉に諸国の武士を召集した所、果してその通りであつたので厚くその忠義を賞したという作である。事実を穿鑿するより我々はたゞ優美芳醇な物語に陶醉すればよい。

と断定し、その事柄の伝説であるか否かは既に問

題ではないと称している。將にその通りであり、その事柄が美しいので真疑の事は問題ではないがその「鉢木」とはどんな物語であろうか。それには謡曲「鉢木」を読むことにしよう。

シテ	佐野常世	シテ	常世	
シテツレ	常世妻	ワキ	時頼	
前	旅僧	後	ワキツレ	侍臣
ワキ	旅僧	ワキツレ	侍臣	
ワキツレ	從者	狂言	從者	

ワキ次第謡「行方定めぬ道なれば、行方定めぬ道なれば、来し方も何処ならまし。(詞)是は一処不任の沙門にて候。我此程は信濃國に候ひしが、余りに雪深くなり候ほどに、まづ此度は鎌倉に上り、春になり修行に出ではやと思ひ候。(道行謡)信濃なる 浅間の嶽に立つ煙、浅間の嶽に立つ煙、遠近人の袖寒く、吹くや嵐の大井山、捨つる身になき友野里、今ぞ浮世を離坂、墨の衣の碓氷川、下す筏の板鼻や、佐野の渡に著きにけり。佐野の渡に著きにけり。

ワキ詞「急ぎ候程に、上野國佐野の渡に著きて候。あら笑止や又雪の降り来りて候。此所に宿を借らばやと思ひ候。いかに此屋の内へ案内申

し候。シテツレ詞「誰にてわたり候ぞ、ワキ詞「是は修行者にて候、一夜の宿を御貸候へ。シテツレ詞「易き御事にて候へども、主の御留守にて候程に、御宿は叶ひ候まじ。ワキ詞「さらば御帰りまで是に待ち申さうずるにて候。シテツレ詞「それはともかくもにて候。わらはは外面へ出でむかひ、此由を申さばやと思ひ候。

シテ詞「あゝ降つたる雪かな。如何に世にある人の面白う候らん。それ雪は鵝毛に似て飛んで散乱し、人は鶴髦を著て立つて徘徊すると言へり。されば今ふる雪も、もと見し雪にかはらねども、我は鶴髦を著て立つて徘徊すべき。

(謡) 杖も朽ちて袖せばき、細布衣陸奥の、けふの寒さを如何にせん。あら面白からずの雪の日やな。(詞) あら思ひよらずや。此大雪に何とて是にたゞずみて御入り候ぞ。ツレ詞「さん候修行者の御入り候が、一夜の御宿と仰せ候ほどに、御留守の由申して候へば、御帰るまで御待ちあらうずるよし仰せ候程に、御留守の由申して候へば、御帰るまで待ちあらうずるよし仰せ候程に、是まで参りて候。シテ詞「さてその

修行者はいづくに渡り候ぞ。シテツレ詞『あれに御入り候。ワキ詞『我等が事にて候。いまだ日は高く候へども、余りの大雪にて前後を忘れて候ほどに、一夜の宿を御貸し候へ。シテ詞『易き事にて候へども、余りに見苦しく候ほどにお宿は叶ひ候まじ。ワキ詞『いやいや見苦しきは苦しからぬ事にて候。ひらに一夜を御貸し候へ。シテ詞『留め申したくは候へども、我等夫婦さへ住みかねたる体にて候ほどに、なか／＼御宿は思ひもよらぬ事にて候。是より十八町あなたに、山本の里とてよき泊の候。日の暮れぬさきに一足もはやく御出で候へ。ワキ詞『さてはしかと御貸しあるまじいにて候か。シテ詞『御痛はしくは存じ候へども、御宿は参らせがたう候。ワキ詞『あら曲もなや、よしなき人を待ち申して候ものかな。シテツレ詞『あさましや我等がやうに衰ふるも、前世の飛行つたなき故なり。せめてはかやうの人の値遇申してこそ後の世の便ともなるべけれ。然るべくは御宿を参らせ給ひ候へ。シテ詞『さやうに思召さば何とて以前には承り候はぬぞ。いや此大雪に遠

ども、何にても参らせうずる物もなく候。折節これに粟の飯のあるよし申し候。苦しからずは聞し召され候へ。ワキ詞『それこそ日本一の事にて候賜はり候へ。シテ詞『なうきこし召されうずると仰せり。急いで参らせられ候へ。シテツレ詞『心得申し候。シテ詞『給じて此粟と申す物は、古へ世にありし時は、歌に詠み詩に作りたるこそ承りて候に、今は此粟をもつて身命を継ぎ候。げにや廬生が見し榮花の夢は五十年其邯鄲の仮枕、一睡の夢のさめしも、粟飯かしぐ程ぞかし。あはれやげに我も打ちも寝て、夢にも昔を見るならば、慰む事もあるべきに(謡)なう御覽ぜよかほどまで、地謡『住みうかれたる故郷の、松風寒き夜もすがら、寝られねば夢も見ず、何思出のあるべき。シテ詞『夜の更くるについで次第に寒くなり候。何をがな火に焚いてあて参らせ候べき。や、思ひ出だしたる事の候。鉢の木を持ちて候。是を切り火に焚いてあて申し候べし。ワキ詞『げにげに鉢の木の候よ。シテ詞『さん候某世にありし時は、鉢の木に好き多数木を集め持ちて候ひしを、かやうの

くは御出候まじ。某追付き留め申し候べし。なう／＼旅人御宿参らせうなう。余りの大雪に申す事も聞えぬげに候。痛はしの御有様やな。もと降る雪に道を忘れ、今ふる雪に行方を失ひ、一所にたゞずみて、袖なる雪を打ち払ひ打ち払ひし給ふ気色(謡)古歌の心に似たるぞや。駒とめて袖うちはらふ蔭もなし、(詞)佐野の渡の雪の夕暮。かやうによみしは大和路や、(謡)三輪が崎なる佐野のわたり、地謡『是は東路の佐野の渡りの雪の暮に、迷ひつかれ給はんより、見苦しく候へど、一夜は泊り給へや。(上歌)げに是も旅の宿、げに是も旅の宿、仮初ながら値遇の縁、一樹の蔭のやどりも、此世ならぬ契なり。それは雨の木蔭、是は雪の軒ふりて、憂き寝ながらの草枕、夢より霜や結ぶらん。夢より霜や結ぶらん。

体に罷りなり。いや／＼木好きも無用と存じ、皆人に参らせて候さりながら、今も梅桜松を持ちて候。あの雪もちたる木にて候。某が秘蔵にて候へども、今夜のおもてなしに、是を火に焚きあて申さうずるにて候。ワキ詞『いや／＼は思ひもよらぬ事にて候。御志はありがたう候へども、自然又おこと世に出で給はん時の御慰みにて候間、中々思ひもよらず候。シテ詞『いやとて身は埋木の花咲く世に逢はん事、今此身にてはあひ難し。シテツレ謡『唯いたづらなる鉢の木を、御身の為に焚くならば、シテ詞『是ぞ誠に難行の、法の薪と思召せ。ツレ謡『しかも此程雪ふりて、シテ謡『仙人に仕へし雪山の薪、シテツレ謡『かくこそあらめ。シテ謡『我も身を、地謡『捨人の為の鉢の木、切るとてもよしや惜からじと、雪打ち払ひて見れば面白やいかにせん、先冬木より咲きそむる。窓の梅の北面は、雪封じて寒きにも、異木よりまつ先だてば、梅を切りや初むべき、見じといふ人こそ憂けれ山里の、折りかけ垣の梅をだに、情なしと惜しみにしに、今更薪になすべしと、かねて思

ひきや。(クセ)桜を見れば春ごとに、花少し遅ければ、此木やわぶると、心をつくし育てしに今は我のみわびて住む、家棧切りくべて、耕棧になすぞ悲しき。シテ謡『さて松はさしもげに地謡『枝をため葉をすかして、かゝりあれと植多置きし、其かひ今は嵐吹く、松はもとより煙にて、薪となるも理や、切りくべて今ぞ御垣守衛士の焚く火はお為なり、よく寄りてあたり給へや。

ワキ詞『近頃よき火にあたり寒さを忘れて候。シテ詞『御出でにより我等も火にあたりて候。ワキ詞『いかに申し候、主の御名字をば、何と申し候ぞ承りたく候。シテ詞『いや某は名字もなき者にて候。ワキ詞『何と仰せ候とも、常人とは見え給はず候。自然の時の為にて候。なにの苦しう候べき。御名字を承り候べし。シテ詞『此上は何をか包み候べき。是こそ佐野の源左衛門の尉常世がなれる果にて候。ワキ詞『それは何とてかやうの散々の体にはなり給ひて候ぞシテ詞『其事にて候。一族ともに押領せられてかやうの身となりて候。ワキ詞『なうそれは何

暇申して、シテツレ謡『御出でか。ワキ謡『さばよ常世。シテツレ謡『また御入り、地謡『自然鎌倉に、御上りあらばお尋ねあれ。希有が法師なり。かひんしくはなけれども、公方の縁になり申さん。御沙汰捨てさせ給ふなど、いひすて、出船の、共に名残やをしむらん、共に名残やをしむらん。(中入)後シテ謡『いかにあれなる旅人、(詞)鎌倉へ勢の上るといふは真か。何夥しく上る。さぞあるらん。東八個国の大名小名、思ひ／＼の鎌倉入り。さぞ見事に候らん。白金物打つたる糸毛の具足に、金銀をのべたる太刀かたな、飼ひに飼うたる馬に乗り、乗替中間きらびやかに、うちつれうちつれのぼるなかに、常世が常にかはりたる、馬物具や打物の、物其ものにあらざる気色(謡)さぞ笑ふらんさりながら、所存は誰にも劣るまじと心ばかりは勇めども、勇みかねたる瘦馬の、あら道おそや。地謡『急げども、急げども、弱きに弱き柳の糸の、シテ謡『よれによれたる瘦馬なれば、地謡『打どもあふれども、先へは進まぬ足弱車の、乗り力なければ追ひかけたり。

とて鎌倉へ御上り候ひて、其御沙汰は候はぬぞ。シテ詞『運の尽くる所は最明寺殿さへ修行に御出で候上は候。かやうにおちぶれては候へども御覽候へ是に物の具一領長刀一えだ、又あれに馬をも一疋つないで持ちて候。是は只今にもあれ鎌倉に御大事あらば、ちぎれたりとも此具足取つて投げかけ、錆びたりとも長刀を持ち、瘦せたりともあの馬に乗り、一番に馳せ参じ著到に付き(謡)さて合戦始まらば、地謡『敵大勢ありとても、敵大勢ありとても、一番に破つて入り、思ふ敵と寄合ひて、死なん此身の、此儘ならば徒に、飢に疲れて死なん命、何ぼう無念の事ぞ。ロンギワキ謡『よしや身の、かくては果てじ只頼め、我世の中にあらんほど、又こそ参り候はめ、暇申して出るなり。ツレ謡『名残惜しの御事や。始めはつつ我宿の、さも見苦しく候へど、しばしは留まり給へや。ワキ謡『留まる名残のまゝならば、さて幾たびか雪の日の、シテツレ謡『空さへ寒き此暮に、ワキ謡『いづくに宿を狩衣、シテツレ謡『今日ばかり留まり給へや。ワキ謡『名残は宿にとまれども、

ワキ謡『いかに誰かある。ワキツレ詞『御前に候。ワキ詞『国々の軍勢どもは皆々来りてあるか。ワキツレ詞『さん候悉く参りて候。ワキ詞『其諸軍勢の中に、いかにもちぎれたる具足を著、錆たる長刀を持ち、瘦せたる馬を自身ひかへたる武者一騎あるべし。急いで此方へ来れと申し候へ。ワキツレ詞『畏つて候。いかに誰かある。狂言詞『御前に候。ワキツレ詞『君よりの御説には、諸軍勢の中にもちぎれたる具足を著錆びたる長刀を持ち、瘦たる馬を自身控へたる武士有るべし。急いで尋ねて御前へ参れとの御事にて候。狂言詞『畏つて候。いかに申し候。シテ詞『上意にて候。何事にて候ぞ。狂言詞『急いで御前へ御参り候へ。シテ詞『何と某に御前へ参れと候や。狂言詞『なか／＼のこと。シテ詞『思ひよらずや。これは定めて人違にて候べし。狂言詞『いやいや其方の事にて候。其仔細は諸軍勢の中に、いかに見苦しき武者をつけて参れとの御事にて候か、見申せば其方ほど見苦しき武者も候はぬ程にさて申し候。急いで御参り候へ。シテ詞『何とたとへば諸軍勢の中

にいかにも見苦しき武者に参れと候や。狂言詞『なかなかの事。シテ詞』さては某が事にて候べし。畏つたと御申し候へ。狂言詞『心得申し候。』

シテ詞『げに〜是も心得たり。某が敵人謀叛人と申し上げ、御前に召し出だされ頭を刎ねられん為な。よし〜それも力なし。いでいで御前に参らんと(謡)大床さして見渡せば、地謡『今度の早打に、今度の早打に、上り集る兵、きら星の如くなみ居たり。さて御前にて諸侍、其外数人なみ居つゝ、目を引き指をさし笑ひあへる其中に、シテ謡『横縫のちぎれたる、地謡『古腹巻に、錆長刀、やう〜に横たへ、わるびれたる気色もなく、参りて御前に畏る。』

ワキ詞『やあ如何にあれなるは佐野の源左衛門の尉常世か。是こそいつぞやの大雪に宿かりし修行者よ。見忘れてあるか。いで汝佐野にて申せしよな。今にてもあれ鎌倉に御大事あるならば、ちぎれたりとも其具足取つて投げ懸け、錆びたりとも其長刀を持ち、瘦せたりともあの馬に乗り、一番に馳せ参るべきよし申しつる、言

帰るぞうれしかりける。帰るぞうれしかりける

時は康元の或る年(西暦一二五六年ともいう)の雪降る夕暮(十一月十三日ともいう)お羽打ちからした旅の僧が、上野国佐野源左衛門常世がわび住いに宿を乞うくだりから、鎌倉の御殿に常世がこの晴れの恩賞に、やせたりといえども駒に鞭打つて、上野の佐野へ凱旋する美しい姿が『鉢木』の幕切れとなつてゐる。謡曲『鉢木』の上から見ると、物語りが上野国佐野村を中心として起り、時頼をめぐり舞台が鎌倉に移つて更に常世が上野の佐野へ帰る晴れ姿までかゝれてゐるのである。

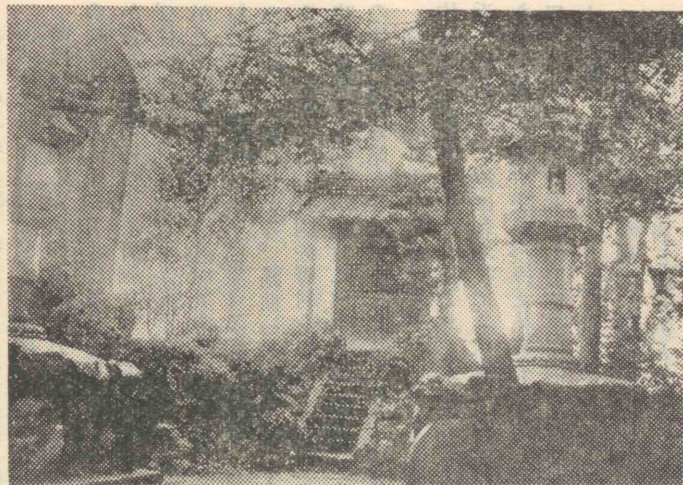
向こゝに書かれてゐる大井山は、今の長野県北佐久郡岩村町田辺を大井庄と称したので、その附近の山らしく、或は和名抄に『筑摩郡大井郷』とある筑摩郡の大井であらうとも云われる。『伴の里』は、南佐久郡北部の旧庄名で、今の岸野村の大字にその名がある。これは世を捨てたので交わる友もないというのを地名伴野にいかけたものである『離坂』は杳掛と軽井沢との間にある離山の坂路である。また加賀に梅田は河北郡森本村大

葉の末を違へずして、参りたるこそ神妙なれ。

先々今度の勢づかひ、全く餘の義にあらず。常世が言葉の末、真か偽か知らんためなり。又当参の人々も訴訟あらば申すべし、理非によつて其沙汰いたすべき処なり。先々沙汰の始には、常世が本領佐野の庄、三十余郷返し与ふる所なり。又何よりも切なりしは。大雪ふつて寒かりしに、秘藏せし鉢の木を切り、火に焚きあてし志をば、いつの世にかは忘るべき。いで其時の鉢の木は、梅桜松にてありしよな。其返報に、加賀に梅田、越中に桜井、上野に松井田、合せて三個の庄、子々孫々に至るまで、相違あらざる自筆の状、(謡)安堵に取り添へ給ひければ、シテ謡『常世は之を賜はりて、地謡『常世は之を賜りて、三度頂戴仕り、これ見給へや人々よ始め笑ひしともがらも、是ほどの御気色、さぞ羨ましかるらん。さて国々の諸軍勢、皆御暇賜はり、故郷へとぞ帰りける。シテ謡『其中に常世は、地謡『其中に常世は、よろこびの眉を開きつゝ、今こそ勇め此馬に、うちのりて上野や佐野の舟橋とりはなれし、本領に安堵して、

字梅田、越中に桜井は富山県下新川郡三日市辺の旧庄名で、上野に松井田は、古謡本には松枝とあり、刊行会本にも『まつえだ』と仮名を振つてゐるが、碓氷郡松井田のことである。また文中『安堵』に云々は土地の所有権を認めるということである。『沙門』は僧の意『板鼻』は安中の次にある駅板鼻で、筏の板にかける『袖せびき』は細布衣の形容。陸奥の名産である。『げにや蘆生が』は支那、蜀の国に、蘆生といふ少年があつて、邯鄲の地で道士呂翁の枕に臥した時妻をとり諸候となり五子を産み、八十才迄も榮華を極めた夢を見たがそれも旅宿の粟飯の出来る間の僅な時間であつたという故事からもつて来たものである。

こゝにある碓氷川は、碓氷峠を源とする碓氷川で、高崎の高松町、旧高崎城西壁で烏川に合流している。板鼻は碓氷郡安中町と高崎市との間にある小宿(現安中町)佐野の渡りとはるは、高崎市上佐野町地内(旧群馬郡佐野村、上佐野)の烏川で(碓氷川と烏川と合流したその下流)に古くから佐野の渡があり、こゝが即ち鎌倉街道の船渡しであつた。こゝの小高い丘の辺に源左衛門常世の



一常世神社全景一

屋敷趾と称するものがあつて、時頼が信濃路から碓氷峠をくだつて和田宿(今の高崎市)の佐野の渡りでの出来ごとが、この謡曲の中心となつてゐる。

文献に現われた常世

謡曲『鉢木』の主人公が果して実在したか、或は架空の人物であらうか問題を少ししぼつて、常世に関する古文書を調べて見よう。しかし残念なことに本県で発行された古文書の中にはこのことがないが、『木曾名所図絵』に

佐野源左衛門常世という鎌倉武士が、入道時頼の行脚に佐野で逢い、梅桜松の盆樹をたいてもてなし、のちに鎌倉に召され云々、

『鉢木』のことが記載されて居り『捨葉抄』の中には、

佐野源左衛門尉常世は上州佐野の住人俵藤田秀郷の末孫三良政常が子なり。

とあり『純本朝通鑑』にも

し諸国を微行し佐野渡にて大雪にあい、佐野源左衛門常世の情にて一夜を宿し云々、
とあり『史鑑』にも、
北条時頼は、康元元年入道して最明寺と称し、雪の降る夕暮佐野の地にて佐野源左衛門常世という鎌倉武士に逢い云々、
と『鉢木』の事実をのせている。明治四十三年十二月発行された早川愿次郎著の「高崎案内」という近代書には源左衛門屋敷という項に次のことが僅かに見える。
常世の遺跡と称せし地も今は畑となりて一物の徴憑なしと雖も木曾名所図絵、和漢三才図絵等にも記載し謡曲鉢木の木に委曲を尽しあり伝説の如くならざるも何物かありしならん。一説には増鏡の難波の尼の話の本として作為せしなりと云いかゞにや。

と書いて疑問をはさんでいる。昭和二十八年十二月平凡社発行の下中弥三郎著「大人名辞典」の常世の項に、

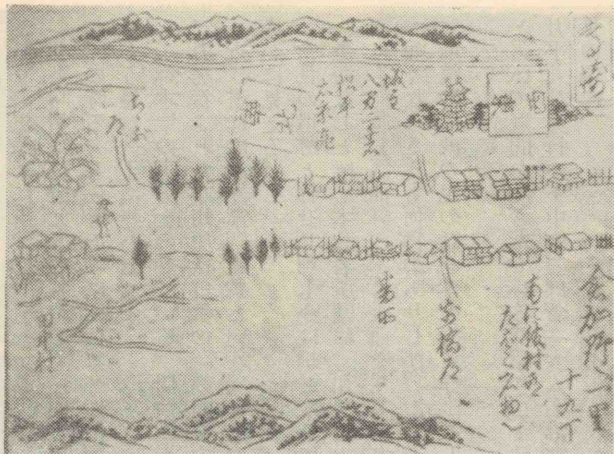
鎌倉時代の武人「名跡志」には恒世もあり源左衛門と称す。上野国群馬郡佐野を領す。故あり

て市橋修理大頭を討ちしため常世の妹婿平内兵衛の家に預けらる。妹婿常世の兄正信と謀りて常世を殺しその所領を奪い取らんとす。その妹これを常世に密告し早く逃れよと勤む。常世室外に出で、これを窺ひるしに、妹婿暗き室内に侵入して斬り散らし燈火を照らして見ればその妻の死体なり、この時市橋の家来、主のため常世を討ちたりと書き附けてあつた。常世はその所領を奪はれても旧領地へ逃れ、かくて常世は零落の生活を送りゐし中、北条時頼が行脚僧となつて諸国を視察せる途中一宿の宿りをせる事縁となり遂にその所領を回復せしこと世に伝わる。或はこの事蹟は仮作なりともいふ「南畝叢書」に「佐野源左衛門常世といふ人寓言なるを知る人なし」とある。

「名跡志」にのせてあることを記し最後に「南畝叢書」を引用して源左衛門という人物は居なかつたとも結んでいるのは注目される。更に昭和二十七年六月、東京堂発行の大類伸監修「世界人物辞典」東洋篇「佐野常世」では、

鎌倉時代、武士、源左衛門と称す。最明寺時頼

の廻国伝説による謡曲「鉢木」の主人公、鎌倉



一中仙道高崎宿縮図一

武士の典型として有名である。それによれば彼

は上野国群馬郡佐野を領していた。(後略)
とあり 大正十三年八月、立川文明堂発行大町桂
月監修峰谷時順著「謡曲辞典」に「鉢木」は観阿
弥作曲又は世阿弥作ともいう、とて次の事柄が記
されている。

北条時頼難髪して最明寺入道と号し窃に鎌倉を
忍び出て諸国行脚の道につき政治其他の得失を
考察す。偶々上野国佐野の郷に入りて風雪に会
し佐野源左衛門常世が寮居に一宿を求む(省略)
天保十三壬寅正月(西暦一八四二年) 発行「東海
木曾両道中懐宝図鑑」の木曾路高崎のところに、
(城主八万二千石松平右京亮に隣して田中村附
近地図中に舟橋のあつたこと「佐野源左衛門常
世がすみし所とも云」

と記されて名所の一つとされている。尙この「東
海木曾両道中懐宝図鑑」は日本橋源原屋の家伝出
版で同じものが明和二乙丙正月(西暦一七六五年)
にも発行されている。

明治三十二年六月東京図書出版会発行修訂増補「
帝国人名辞典」に「佐野常世」として、
常世は源左衛門と称す下野の人なり、相伝ふ、

北条時頼出家して奉行頭人の可否を試みると欲
し、廻国行脚す。一日日くれて大雪に逢ふ。途
中に一草廬あり、強いて一宿を乞い入りて之を

窺うに唯やせ馬と古鎧あるのみにして一簞の食
一の柴だになし、然るに其主鉢木の梅桜松等を
きり之をやきて敵寒を防かしめしかば、時頼大
いにその深情に感じ姓名及び其零落の次第を問
ふ。答へて曰く、源左衛門也、われ妹婿のため
に領地を奪われしも未だ之を訴ふるの便を得ず
もし一旦鎌倉に事あらば、則ちはせ参して功を
立て、宿志を遂げんと欲す。故に馬具を棄てず
と、既にして鎌倉急に軍兵を招く、常世乃ちは
せて到る。時頼之を見て曰く、曾て汝が家に宿
せしは我也、今や無事然るに兵を集めしは汝を
試みんとてなりと、乃ち本領を復し尙加賀の梅
田、越中の桜井、上野の松井田を加え以て鉢木
の恩に報いしといふ。

この著では佐野源左衛門を下野の人と伝えてあり
昭和二十七年四月発行清水書院の「資料日本史」
の中に「北条時頼」のところでもまた「増鏡巻十
一草まくら」にも

出家后、ひそかに諸国を巡つて視察をしたとい
われ、鉢木の木の伝説がのこつている云々。

太平記巻三十五「北野通夜物語事附青砥左衛門事」
に、軒傾いた家に宿を借りるくだりが書かれてい
るが、これは摂津国難波浦で相手は年老いた尼公
であり、また、時頼出家して廻国巡歴したことは
鎌倉時代に武士の手で編纂された「吾妻鏡」には
出ていないので、史家の間には時頼が上野へ行つ
たことがないので従つて「鉢木」は史実として疑
問をもつものさであるが、同じ鎌倉時代に「水鏡」
と共に編纂された増鏡巻十一「草まくら」には康
元元年に頭をおろして時頼が諸国を修行したこと
がくわしく記載されている。

明治四十三年十二月三省堂発行「日本百科大辞典」
巻四によると「佐野渡」に

謡曲鉢の木によりて有名なる佐野源左衛門の居
地に在りし渡船場の称、船橋を架してその名し
ばしば古歌に顕わる。但し文明十七年の堯恵の
北国紀行に「十一月五日には佐野船橋に至りぬ
……あともなく昔をつなぐ船橋は唯言の葉の佐
野の冬原」とあれば元の流も水あせて古の渡の

一跡も止めずありしものゝ如し。今上野国群馬郡佐野村に大字上佐野。下佐野、佐野窪など称する地あり、けだし其故地の名を伝ふるなるべしまた「越中志微」下巻の「桜井庄」の中に書かれているものに、

純本朝通鑑卷百二、龜山天皇弘長三年十一月戊寅朔巳刻、正五位下前相模守北条時頼入道道崇卒于最明寺北亭二年三十七(六九〇)余年前云々俗伝、時頼微行諸国云々、到信濃国欲歸鎌倉、過佐野渡、大雪迷路、欲投宿、叩山人之門請宿、云々、時頼及婦鎌倉脱微服時宗等大悅如其再生末幾而時頼、試令諸国大名兵于鎌倉、群士來集、云々、時頼召命曰、汝者佐野左衛門尉常世乎、我嘗微行大雪之夜宿汝家、汝伐益山之樹為薪、而使我不可寒供粟飯而使我不飢、語我以勇壯之事、我厚其志感其言一飯之恩、不可不報之、一言之美、不可不揚之、其益山所報之者、則梅桜松也、今賞汝之忠誠復其旧領且報汝之宿恩授以加賀梅田、越中桜井、上野松枝三邑、常世感戴謝思、群士美時頼之揚

門常世の志を感じ、他日加賀の梅田、越中の桜井等を之に与ふること純本朝通鑑に載す。若此こと実説なるときは時頼我越加二州をも経過せる成るへし、然らずんば豈梅田桜井をしらんや然れども正しき書に於て見るることなし、只演劇曲中此事を伝るを以て世に之を喋々と口に騰け又先達記は之に無稽の談を附合して、更に庸俗の迷を起す、此等の書は皆覆醬にして可ならん砺波郡西明寺村領の阿弥陀堂谷に二石あり、最明寺微行の時の憩し石と古來伝言す。是亦不足信

とこれは手きびしく最明寺の微行すら否定し「鉢木」も演劇の類とかたづけ居り、佐野を長野県と云つて居る。明治二十九年佐成謙太郎著による「謡曲大観」四巻による「鉢木」の解説のなかに作者は「能本作者註文により世阿弥の作とす。言継郷記に天文十四年十月十一日演能のことを記す」とあり「出典」は北条時頼が廻国巡歴したときの出来ごとであり「所」は第一段上野国佐野、第二段相模国鎌倉で、登場人物の佐野源左衛門常世は架空の人物である。

善、而美常世之逢榮、按東鑑、不載時頼巡国之事、則非無疑焉然自建長至弘長之間、併載俗説、不審其事果実否大正九年十月太田亮著甲陽堂発行の「姓氏家系辞書」による佐野源左衛門の項に、

佐野氏下野、秀郷流氏族、足利氏族、あそ郡佐野より出づ、秀郷七世の孫足利宗綱の子成保、景綱(佐野小太郎)弟宗綱(佐野五郎)また結城系図に戸矢有綱一基綱(佐野太郎)清綱一真綱一信吉一佐野城にあり、秀吉に仕へ三万九千石を領す、徳川氏に没収さる。
家紋蝶三頭左巴蛇の目
佐野氏伊勢秀郷流
家紋一鎧蝶、ちがひ蝶
佐野氏一赤松氏一丸曜、揚羽蝶
佐野氏、稲源氏
家紋、丸に三丁子、六丁子
また明治十七年六月金沢区片町益智館出版富田景周編輯による「三州志」来因杭覧によると、
執権北条氏に至りて北条時頼剃髪して最明寺と号し康元元年諸国微行信州佐野に至り、源左衛

とこれも常世が架空の人物であり作者の脚色であると断定している。

時頼が視察した結果を書いた「人国記」に上州のことがくわしく出ていて、時頼が上州に来たことを意味しているが、この人国記も偽作であつて長野県の人を書いたのであらうと伝えられている上州記の中に、

(前略)碓氷、吾妻利根三郡は信州に似たり、勢田、佐位、新田、片岡郡は信州よりも上での風なり、然れども諸所意地少し譬は吾を容所ありて、慎心なご故小過も大罪になす事あり(下略)「純本朝通鑑」にのせられている「鉢木」のことは前述の通りで「木曾名所図絵」にも

康元元年時頼が最明寺と称して剃髪し諸国の情勢を視察し佐野源左衛門にめぐり逢ひ、その美しい志を知つて桜井、松枝、梅田の三邑を与えた。(内容省略)

とあり、その美挙をたゞえている。また「和漢三才図絵」にも同様のことが記されている。

郷土史から見た「鉢木」

古文書による文献はこの他に相当あるものと考へられるがその材料もないので、次は地元高崎市に残されている文献を少し調べて更にこの事件に最も関係の深い栃木県の佐野、並に源左衛門が住み子孫も代々居住したという富山県三日市（桜井の庄）にどんな文献があるかも調査をすゝめて見よう。

群馬県下で出版されているもので岡部福蔵著の「上野人物志」の中には常世のことは一つもなく安永九年高崎藩士の川野辺寛が作つた「高崎志」の中にもまた「上野名跡考」にも見えない。僅かに明治四十三年九月群馬県協賛会編纂による「群馬県案内」に次の様に記載されているのが、古いものゝ様である。これは前橋に共進会高崎に教育展覧会が同時に開催されたときの協賛出版である。佐野の渡、高崎より山名藤岡に至る通路に方り烏川に沿ふ、この地は有名な佐野渡として人々に膾炙し、往古は船橋ありしにや、旧記に佐野の舟橋と云ふ文字諸所に見ゆ、距今六百五十余

年佐野源左衛門常世冤罪に依り貶せられて此地に潜居す 一日天に雪ふる、偶々行脚僧の宿を乞ふあり（中略）是歴史の伝ふる所又夙に謡曲『鉢の木』によりて斯道者愛吟措かざる所とす。

と「鉢木」の史実を記している。昭和三年東京三明社発行柴田常惠著「群馬の史蹟名勝」には（前略）『謡曲『鉢の木』に見ゆる佐野渡も舟橋であつた様であり、附近に源左衛門屋敷、源左衛門八幡等の遺蹟も存してゐるから、時頼巡歴の砌此の地を通つたとすれば、この佐野渡も恐らく此の附近であつたらうと思はれる。』同じ年の昭和三年一月一日発行白石一の「高崎大観」には、謡曲『鉢の木』で知られた佐野源左衛門常世の遺蹟は佐野村小字吹屋にある今は桑園となつて丘上に小祠を祀り、常世神社と称して村人が崇敬してゐる。

たゞこれだけであるが、昭和二年八月高崎市が発行した「高崎市史」下巻に「佐野常世の事蹟」として次の様に相当くわしく書かれている。佐野村小字吹屋に源左衛門常世の遺蹟として有

名なるものあり、今は桑園竹林となり丘上に一小祠あり、同地の堀口孫次郎氏の常世の系譜の写に常世は鎌足を祖とす、四代家綱より九代迄下野唐沢山城主となり、十代国綱同国佐野の城主となり安房守と称す、十二代常春始めて上野上佐野城主となり、佐野小太郎源左衛門尉と号し、六万三千貫上下佐野を領す。嘉禎三年（紀元一八九七）卒す（北条泰時々代）鎌倉より故ありて所領被召上浪人す其子即ち常世なり云々一説に曰く、宝治建長の間に蟄居す、所謂故ありて云々は佐野三郎正経の子佐藤々太経俊（一に常景に作る）は常世の伯父なり、一族と共に所領を横領す、常世は生地なる此地に来る。時頼諸国行脚より還り之れを決断し本領安堵云々又系譜によれば建長六年（紀元一九一四）常世鎌倉に召され、四ヶ国にて三十七領拜領、小田原縁者方へ立寄逗留致し、上野へ赴き候処、馬入川満水、馬共に水死す、嫡子常行十五才になる。慶長二年の春母同道鎌倉へ罷出時宗に父水死の訳委細申上御目見被仰付、父の本領の内、上野下野三十七ヶ所、被下置上野佐野に在住す

其姉は十八才父の水死の爲め出家願成寺に庵居す（下野佐野葛布にあり）碑石に松学妙永比丘尼と云う。

常世の子常高、以来、常之、常久、国常（伊勢守）元国に伝へ、世々佐野に居ると記するも惜哉年代の記載なきのみならず、一の証跡なく屋敷趾と称する所あるのみ。

以上の三記事は単に伝記に止るのみ、他に二三研究あるも、直接市に関係なきを以て総て省略せり。

当時高崎市史を發行したときは佐野は群馬郡に属して居り高崎市とは直接関係がないため、佐野常世に関し余り突込んだ調査もして居らず、こゝでも伝説として取りあげて居る、図書館長田島武夫の編「高崎市の名勝旧跡」のうち「佐野の渡し」には、

上佐野から佐野窪にかゝる路傍に船木観音の碑があり、万葉の古歌「かみつけの佐野の船橋とりはなし親はさくれど吾はさかるがへ」と刻している。裏面に古道佐野渡とあり、文政十年延養寺の僧良翁が識しかつ建てたものである。こ

の歌に因んで朝日の長者、夕日の長者の子女が
はかない恋に散つた悲恋物語があり「佐野の舟
橋」の名と共に今に語り伝えてある。

この附近は「鉢の木」で名高い清廉忠誠の士佐
野源左衛門常世の遺蹟であるという、その屋敷
跡には常世神社が祀られ、唐金の茶釜をはじめ
出土品も多い。

また昭和三十年六月発行の「高崎市勢要覧」の旧
蹟のうち「佐野の渡し」には、

市内上佐野地内にあり今では佐野橋がかげられ
交通上の要地になつてゐる。泉道沿いにある西
光寺の西に舟木観音と称せられる板碑があり、
万葉の古歌「上野の佐野の舟橋とりはなし親は
さくれどわはさかるがへ」を刻し裏面に「古道
佐野渡」と記してある。昔鳥川を隔てた兩岸に
朝日、夕日の長者があり、その両家の子供同士
が親の許さぬ恋に落ちて将来を誓つた二人を親
が会わせまいとして舟橋の板子をとりはずした
ため、そのことを知らない子供らが暗夜河中に
転落、溺死した悲しい物語が伝えられている。

常世の屋敷跡

従て学者の意見も区々にして一定せず、されば
今はたゞ在来の書籍と伝説とを参考として其の
物語の概要を録することゝせり。

(一)佐野家の祖先

佐野家は彼の驍武にして且つ籌略ありし藤原秀
郷より出づ、秀郷は左大臣魚名の後裔なり、秀
郷は又田原藤太と称せし人にして下野椽押領使
となり六位に叙せらる。後功を以て従四位下を
授けられ功田を賜ひ世襲せしむ、下野武蔵の両
国守となり鎮守府將軍に任ぜらる(大日本史)

(二)佐野源左衛門の生地

佐野家は代々下野の国に住し下野武蔵を領地と
せしかば、源左衛門は下野国安蘇郡佐野に生れ
たり、今より大凡六百九十余年前ならん。

(三)源左衛門の上野国佐野に來りし由來

源左衛門は佐野家の後を継ぐべき武士なり、然
るところ源左衛門十六才の時不幸にも母病死せ
り、母を失へる彼の歎きは一方ならず、父子共
に寂しき間に数年を過したりしも、妻なき一家
の不便は後妻を迎へしむるに至り、纏て一子善
左衛門を儲けたり。人の子より我子の可愛ゆき

佐野の渡しに近く謠曲「鉢木」で知られた鎌倉
武士佐野源左衛門常世の遺蹟がある。地元民の
祀つた常世神社も上佐野町吹屋の屋敷跡に祀ら
れている。吹雪の夕暮れ旅僧(北条時頼)に一
夜の宿を与えたが浪々の身として薪の貯えもなく
愛蔵の盆栽を手折つて薪とし暖をとつた古事は
余りにも有名である。

以上高崎市現存の史実で出版物によると佐野源左
衛門を中心とした物語りがやゝ具體的となり常世
の系譜の写しまで現われて伝説から一步前進した
感もあるが、これ等はいづれも伝説という文字を
どこかに使用して確実性を欠いている。

高崎市史発行の頃の佐野は、群馬郡に属していた
ので、更に大正十四年十月発行された「群馬県群
馬郡誌」をのぞいて見ると「佐野源左衛門(佐野
村)」の欄に次の様に記載されている。

佐野源左衛門常世の事蹟に就ては大に研究を要
する節あり、其の伝記としては、木曾名所図繪
武家評林、風土記前上野志等に見ゆと雖も何れ
も謠曲鉢の木の基本として敷衍したる物語に過
ぎずして一も正史古記録の徵すべきものなし、

は人情の常ならん、後妻は遂に兄源左衛門を疎
んじ、佐野家の後を善左衛門をして継がせんと
せり、然るに生れながら聰明なる源左衛門は孝
養怠りなく真の母親の如くに仕へければ、継母
は彼を放逐するの機会を得ず、遂に彼に対して
殺意を生ずるに至れり。乃ち召使の長兵衛(伊
勢の人)に百斤の金を与ふべしと約し之を命ぜ
り此の時佐野家の人々は公用のため鎌倉に居た
るを幸、源左衛門に用事を命じて長兵衛と共に
下野佐野に歸らしむ、源左衛門乃ち長兵衛を伴
ひ鎌倉を立ちて其の日江戸の町に着き宿せり、
当時江戸は小なる町にして不忍の池の端は奥州
に通ずる街道なりき、其の辺草木生ひ茂り景色
勝れ馬子は馬を休め農夫は木蔭に至りて午睡を
なすを常とす、長兵衛は目的を達せんには此の
池畔を最適地とし、宿主に明朝未明出立致すべ
きにつき左様計へよと命じて二人は寝につけり
翌朝二人は予定の如く未明旅立ちの用意なせし
が、其の時源左衛門は浅草觀世音の方に向ひて
合掌して念ずるに、第一に父母、第二弟、第三
僕、第四に自分の安全を祈れり、之を見たる長

兵衛は痛く感動し涙を流して私かに思へらく之れ凡人にあらず、召使の身として此の如き主人を手にかけたらんには如何なる罪報の来らんかと身震ひして竟に止めたり、之れより二人は宿を出立して不忍池畔に至る。茲にて長兵衛は凡てを告白し懺悔して其の罪を謝し、而して曰く我を殺して君の心を慰めよと刀を差出せば、源左衛門は暫時、改心の情溢れし長兵衛の面を凝視しつゝ感泣せるが、稍ありてふと吾に返り其身の不運を追懐することしばしなりしが、思はず歎声を洩らせり、是に於て源左衛門断然覚悟し今日より世を忍ぶ身とならんと刀を取りて髻をぶつりと切り長兵衛に渡して鎌倉に帰らしむ長兵衛乃ち其を継母に渡し源左衛門を不忍池畔にて首尾よく打てりとて約束の金百斤を受取り直ちに召使を辞して伊勢に帰り何不自由なく世を送れりといふ。

彼の継母の悪計に誘はれ主人を殺害せんとしたる顛末を物語り、吾かゝる悪心を起したること何によりてかその罪を謝すべき、依りて朝夕此の主人の絵像を掲げて是に仕ふるなりとしばし泣き伏して止まず、時頼始終の話を聞き了りて同情措く能はず、世にかくも不憫なる人もある哉と悲み給ひて源左衛門を尋ね之を助けんと考へられたり。

(内)時頼源左衛門の家に宿る

かくて時頼諸国を廻る中信濃の国より鎌倉に行かんとして鎌倉街道を上りつゝ、上野国佐野に雪の夕暮迷ひ疲れて源左衛門の家とは知らずして其の家に宿りしなり、其の時の有様は謡曲『鉢の木』により覗ひ知るを得べし。

(外)源左衛門の子孫

織田信長の世に越前加賀の国司に柴田勝家といへる兵機に通じ武功高き人ありき、当時上野には源左衛門の子孫にして佐野六郎と云へる武人ありしが、嘗て娘佐野をつれ、勝家の家来となれり、然るに六郎は病の為に倒れ、娘佐野は勝家滅亡の時世を忍ぶ身となり、是に至りて上

母乃ち源左衛門の死を聞き大に安心して其の子善左衛門に佐野家を相継せしめたりといふ。

(四)北条時頼廻国の事

時頼將軍職を辞するや諸国人民の有様を見んとて行脚僧に身をやつし、私かに各国を廻れり、雨の朝、雪の夕野に伏し山に寐ね人のなき罪によりて悲み居る者などあらば一々行き是を問ひ訊したりといふ(増鏡草枕の巻二)

(四)時頼伝長兵衛の家に宿す

時頼或る時伊勢の大廟に詣でしが、日暮つひに道に迷ひ路傍の一草庵に來りて宿を求めけるに庵主の曰く吾家は人を泊むるが如き家にあらず是より十二町程先きに伝長兵衛とて親切なる人あり旅人など一層喜び迎ふべしと乃ち其の人の案内により伝長兵衛の家に宿る。時頼行脚僧なれば長兵衛の家にて夜の行をなさんと仏前に坐して見るに十六七才位の若き人の絵像ありければ、時頼不審に思ひ行を了りたる後主人に其の絵像の由来を尋ねけり、主人是に於て非常なる懺悔の態にて語り出す様吾今に於て何をかくすべき吾は元佐野源左衛門に仕へし者なりとて、

野佐野村に住せし源左衛門の子孫は全く絶えたり(太閤記に詳し)

(内)源左衛門の屋敷源左衛門の屋敷跡は三畝十五歩程あり、源左衛門の子孫佐野六郎及び其の娘佐野共に流浪して柴田勝家に仕へし後、其の屋敷は草木生ひ茂り、荒れ果てけるを明治十七年登坂藤吉氏はを開墾して桑園とせり。

(外)源左衛門の使用せし茶釜

源左衛門の住居せし屋敷跡を開墾の當時、金の茶釜及び永樂錢、天がん錢を發見せる事あり、此の事遠近に響くや、山田郡園田庄吉、沢渡の園田新七郎の二氏は元老院議長正四位佐野常民公へ明治十八年一月是を御覽に供したりしが、公深く感服なされ、金十五円を御下し給はれり(小林常八氏が蔵す)

(外)源左衛門八幡

尚源左衛門の屋敷跡に八幡の石宮あり、毎年十一月十三日北条時頼の此の地に着きし日なりとて、粟と米との飯を炊きて此の日祭祀を行ふを例とせしが、近年に至り里人常世の遺風を追慕するの余り現在の堂宇を建立し常世神社と改め

崇敬す。

(二)源左衛門の祈願所
源左衛門は上佐野にある菅原神社を厚く信仰せりと、天神縁起にも見え又口碑にも残ることなれば、此の社を祈願所とせしなりと。

(三)楊子の水

西光寺の西より清水流れ出づるあり時頼、此所に於て御顔を洗ひ給ふと言ひ伝ふ。

(四)馬

北条時頼此の村に來り源左衛門の家に一夜の宿を求めける時に、其の妻之を拒みしかば時頼さらばとて立ち去りし後、源左衛門之を聞き急ぎ追ひ詰め時頼に宿をせんとて時頼の乗りたる馬の口を取りしにより、此の地を馬の口といふ。

今の赤石儀市氏宅附近なり。

「群馬郡誌」の伝えるところは「高崎市史」より更に伝説的にして小説的で全面的に信を置くことが出来ないが僅かに屋敷趾が指定されこゝから貴重な出土品が発見されていることが取りあげられる。源左衛門屋敷趾からの出土品が源左衛門愛用のものであるか否かは重大なる問題で、現在源左

木の鳥居、建設記念碑などがあるだけで、如何にも源左衛門の蟄居の跡らしい粗末さである。かたわらに子爵正三位諏訪忠光の「佐野常世のむかしを」と次の歌碑もある。

とこしへに世にのこるら舞ふり積みし雪よ

りふかき きみのまこゝろ 正三位忠光

こゝの屋敷は長者屋敷と称し舟橋の悲恋物語りに関係のある飯野主馬が住んだところで、朝日の長者とよばれていたこの長者屋敷あとに源左衛門が移り住んだのである。豊国学堂の説に佐野村に長者屋敷と称する大規模の古跡あり云々とあるのも証すべきである。

高崎市柳川町小林儀緑家に家宝として現存している茶釜は唐金であり「群馬郡誌」のいう金の茶釜というのは当然誤りである。また昭和二十二年春には更に、同じ屋敷跡から開元通宝(唐武宗)六百五十三枚を始め乾元重宝周元通宝の七一三年以降から永樂錢に至るまで五十種九千二百六十六枚の古錢を掘り出して居り、特に前に発見したのと同じ永樂錢は実に千二十五枚もあつて、この発見は特に注目されている。

衛門にかゝわりのある遺品としてあげられるものが殆どないところから、この茶釜や永樂錢は極めて貴重なものと云える。そして源左衛門研究にとつてこの真実性が大きなポイントとなる訳である。この出土品をめぐる一応現地の状況を見る必要がある。群馬郡佐野村大字上佐野(現高崎市上佐野町)に常世神社の社殿を建築したのは大正九年十一月一日で発起者は上佐野村下組一同としてあり、民家と民家にはさまれた狭い百坪にも足りぬところに高さ六尺余りの土石を盛りあげた上に、間口八尺余、奥行二間位の粗末な社があり、この中に小さな石宮が納まつている。これが本体で、この石宮が即ち「高崎市史」でいう小祠で「群馬郡誌」による源左衛門八幡である。社前には大正十五年三月二十八日「鉢木会」が建てた石碑がある。発起者は下組一同として世話人に斎藤半次郎小林浅五郎、関口慶作、堀口為次郎、高橋兵太郎関口高治、登坂喜三郎、関口岩次郎、関口安五郎沼田栄三郎の名が出て居り表面に「佐野源左衛門常世遺蹟」正四位勲三等子爵日野西資源書と刻んである。この他には村人の寄附した石燈籠一對と



一 常世愛用と伝えられる茶釜一

日本で最初貨幣を鑄造したのは七〇八年で、武蔵国に銅が産出したので、年号を和銅と改め、始めて大陸にまねして和銅開珎を鑄造したものであるが、当時はそうした貨幣を使用せず、物と物の交換で事たり、租税も農作物で納めていたのと和銅開珎は実際には都の周辺でわざわざに使用されたわけであつたが、延喜時代(九〇一—一五七二)に幕府では更に乾元大宝等十二種(万年通宝、神功開宝、隆平永宝、審寿神宝、貞観永宝、承和昌宝、寛平大宝、長年大宝、延喜通宝、饒益神宝)の貨幣がつくられて、あわせて本朝十二銭と云つた。この頃に至ると物々交換にだん／＼不自由を生ずるので、支那から開元通宝を始め沢山の貨幣が輸入されて居たが、更に鎌倉時代(一二三二年)になると、諸工業が始められ、市場が開かれて取引されるようになったので、貨幣の要求がいよいよ高まつたので中国(朱)から沢山の銅銭が輸入されてこれが流通し、従来年貢も物で納めたのをこの頃ではこの中国銭で領主に送る様になつて貨幣の使用が普及されたのである。この支那銭は江戸初期まで使用されたらしく、永樂錢一貫文と鐶

錢四貫文をもつて、金一円に替えたのが通例であつた。鐶錢とは質の悪い鑄造錢である。

小林家の所有する源左衛門屋敷跡から発見されたこれ等の中国古銭は、殆どが鎌倉時代に輸入されたもので、この時代に最も多く流通していたものであるから、古銭としての歴史を調べる上にも五十種類の当時の貨幣は貴重であるばかりでなしに、それが時代を鎌倉幕府をバックとしていただけに、源左衛門とのつながりが考えられるのも当然であり、永樂錢の様に応永十九年(四二二年)時代中国に鑄造されたものもあつて、常世の世代からずつと時代が下つているものも交つていて、常世の後胤のものが、茶釜と共に埋めたものと思われて、この研究は種々の意味で面白い結果が出て来るのではあるまいか。

昭和二十九年ヒョナル社発行萩原進の「上州路伝説篇」の『鉢の木』には鉢の木の古事を記し、更に「当時の邸跡には源左衛門の石宮があり、毎年十一月十三日、粟と米の混合した飯を炊いて供えるという、この伝説については栃木県佐野との間に本家争いがあり、群馬の佐野か、栃木の佐

野か伝説だから何れともいえない」と記しているが、佐野の吹屋部落で、粟と米の混合の飯を供える習慣は、常世が時頼に賭つた粟飯によるもので如何にも貧しい常世神社らしい祭典である。この習慣は石宮の当時から毎年行つて来たもので、いつ頃からかは不明だが、口伝と習慣によりかなり古い時代から実施していると村人は云つている。こゝでは本家争いを伝えているが、『謡曲鉢木』から見ると、上野の佐野であることは疑問をはさむ余地はない様であるが、更に越中にも常世神社があることは初耳であつた。

堀口家にある系図

上佐野の堀口孫次郎が、昭和十四年「上毛及上毛人」の二月号に「佐野源左衛門の事ども」という記事を書いているのは注目すべきものがある。同家に常世の系図の一卷が保存されていることは前にも書いてある。

(前略) 近年小学校の教科書にも共に吾が群馬

郡佐野村の人たることを言明し、其の屋敷跡は現今式反五六畝歩の地を称し字舟木に在り、地形は昔の舟橋の名所に隣し、西は烏川の岸上に在り、南に御下屋敷、東に前屋敷、北に中屋敷等の字名残り、而して常世の祖父豊綱の時代には上野の佐野城と下野の佐野城の城主たりしが後ち深き事情あるに因り家運衰頽し、父常春の代には全く無祿浪々の状態に陥りたり。常世の事蹟は世人の知る所の如くあれば之を略し、其の亡後子常行以来、国常に至る五代の間は代々旧領吾が佐野屋敷に居住す、其証としては屋敷跡の東方少しく南に面して動塚と称する大古墳(有名なる七鈴鏡の出たる)あり、大正十二年の春に其の古墳取払に際し、南麓の底地より文字は不明なれど板碑数基、浮名製の五輪の塔数基及び人骨等を発掘せり、是れ慥かに鎌倉時代のものにして佐野家一族の墓碑なることは識者を俟たずして認定せらるべし、尙又屋敷跡より近年湯釜、古銭等を発掘し現品は同所西光寺に保存せり、扱該系譜の概略を左に記すべし。

●大織冠鎌足公八代嫡子秀郷朝臣五代(記事略)

頼行(総守府將軍出羽陸奥国の守護
秋田城主、故に秋田城之介と云ふ)―兼行―成行―家綱―成実―俊綱―忠綱―成俊―有綱

―基綱―国綱―実綱―豊綱―常春―常世(佐野源左衛門)

―女子…野州葛生町願成寺に今尙石碑在り法名松学妙永比丘尼

―常行…(佐野源左衛門)―常高
―女子…山名上野介に嫁す―常重…和田源内
―行春…佐野源太郎―重世…川合源八郎

―常之…佐野源九郎 佐野源左衛門 佐野源左衛
―行世…佐野源治郎 伊豆守 元国…門 伊勢守
―行利…桜井源次郎 松枝与八郎

この文中湯釜が西光寺に保存されているというのが、今小林家にある唐金の茶釜のことである。これによつて上野の佐野にも屋敷あとばかりでなしに墓地のあつたことを示している。しかし墓石に源左衛門を語る文字が何一つないことは、やつぱり謎として残ることになるが、この記録では常世から国常に至る五代の間この地に居住したとあるのも新説である。堀口孫次郎は大正年代史家として相当名もあり、こゝにある常世の系譜がどうしてこの家に残っているかは、当地で調査しても不明である。

また碓氷郡板鼻町(現安中町)の称名寺には源左衛門が植えたという鶏冠樹が今に残っている。

これは彼が墓地をこの地に選んだのだという伝説が残されていて、松枝との関係に足がかりが出て来ている。(上野伝説研究、伊藤鑄治)

越中に居た源左衛門

佐野源左衛門が上野国佐野に塾居したという記録は以上の他には一寸見当らないが、何れにしても源左衛門常世が下野国の佐野の出身であることはこの記録からも知られるが、次に富山県黒部市桜井庄にある佐野源左衛門の遺跡と、高崎地方では初耳とも云うべき、源左衛門が安養寺を焼払つたといふ伝記をも記して置く必要がある。

佐野源左衛門については従来その遺跡は高崎と佐野となつているが、昭和二十八年五月の日本

交通公社発行の「日本案内記」中部篇の三日市駅

「桜井町」の項には、

宮野遊園地、大島遊園地、越羽浜、八心大市比古神社、佐野源左衛門常世の遺蹟碑等がある。

人口三万三千

と記載し、桜井町に源左衛門の遺蹟のあることを記しているが、更に「下新小郡史稿上巻第九節」に時頼桜井庄を常世に与えたと次の様に記載している。

後深草天皇康元元年(紀元一九一六)北条時頼かしらをおろして後、しのびて諸国を修行してありき(増鏡)佐野に到り雪に逢ひ、佐野源左衛門常世に宿る。常世益樹の梅松桜を伐り焼きて最明寺(時頼号最明寺道崇一名実心)の寒凍を扶く、其志を感じ鎌倉に帰りて加賀の梅田、越中の桜井、上野の松枝の三邑を常世に授く(続本朝通鑑)桜井は今の三日市辺なり(混目抄第四編、第十九章)

欄外、時頼源左衛門が志に感じて桜井を与ふ、

「張長記」「増鏡」「史鑑」掲載のもの略「越路紀行」元祿申年

滑川ウヲ津など過ぎてハヤツケ、片貝など云へる怪しき河幾瀬か渡りて布施の郷、桜井の庄につきぬ、北条殿が、佐野の義士に寄与せる地なぞ云々、

またこの「下新川郡史稿」下巻第十九章に「三日市」の

伝説によれば往古此辺桜枝の里、或は桜枝の荘と称し佐野源左衛門常世、最明寺殿より受領したる三里の一なりと云ふ、古へ三日毎に市をたてたるより三日市と称するなるべく、前田藩となるに及び、寛永十六年二月三日市を賑と定めたり。

問題の三日市とは富山県下新川郡三日市町のこと、昭和十五年紀元二千六百年記念に桜井町となり、更に昭和二十九年黒部市制実施によつて現在は黒部市三日市町になつているが、こゝ三日市には佐野常世に賜つてから常世一族が住んでいた荘館があり、荘館地の一部が現存して居り、こゝに近い高岡市佐野村には佐野神社が祀られている。

佐野神社は元諏訪宮といい、常世の子孫が佐野村開拓の折より奉祀されたもので、のちに佐野神社といわれる様になつた。

この三日市字楼二九一八番地の天神社境内には昭和四年御大典記念事業として三日市立憲青年党が主催となつて建立した「佐野源左衛門尉常世公遺蹟碑」がある。題字は遠裔に当る伯爵佐野常羽がかき、撰文は次の通りである。

康元年北条時頼薙髮改名道宗号了房一
潛行諸国備視察人情風俗偶至上野佐野此
日雪寒劇叩佐野常世門乞宿常世欣迎之供無
薪炭乃折盆栽梅松桜三樹一授炉中使客容取
煖常世元為佐野領主所領為族人所奪炉畔对
坐談偶及此因不知其為時頼也翌晨辞去後
將軍急徵兵於鎌府常世敵甲羸馬馳至柳營見
將軍即雪夜乞宿之借也時頼厚待常世命復
旧領且与桜井梅田松井田三地以酬三樹恩
云桜井庄蓋今三日市是也 九里愛雄選

こゝに辻倉山(一名小梅山)というのがある昔から源左衛門の荘館跡と土地の古老が言い伝え、辻倉山に茶の木と梅の木があり開墾を行つたので、

いたという。

また三日市では明治三十五年に佐野源左衛門常世六〇年祭、昭和三十一年には黒部市が主体となつて佐野源左衛門尉常世と桜井庄七〇〇年祭が行われた。こゝの三日市村浄土宗西徳寺宝物の内千手観音菩薩十一面観音像につき次の様に記録されている。

是は布施之江内之御司佐野源左衛門国広の守本尊也、行基菩薩御十六才ニシテ和銅七年四月十八日朝日ノ前ニ相向御彫刻之千手観音菩薩靈現新タナリ、又川除ノ尊像トモ申ナリ且布施の江内保里欄柵崎筑前守輝長ノ城へ越后国上杉謙信景勝の軍勢押寄責ラレ双方戦ノ節佐野源左衛門国広の守尊像同人老父佐野源左衛門国忠へ預ケラレ追テ右筑前守輝長ト謙信景勝ト戦ノ戦場へ佐野源左衛門加勢ニ出ラレ五日ノ働戦ヲ致シ日終引際ニ流箭ニアタツテ死ス、終ニ右輝長敗軍落城シテ家中百人余リ西ニ散リノニ相成リ輝長越中国内早川谷へ身ヲ隠シテ逝去シケリ時ニ永祿十一年五月

老父佐野源左衛門国忠、子息菩提ノ為、観世音

梅は今はない。今日でも地下からかめの類が出て来るといふ。昔は保壘があり溝堀があつた佐野館跡に五輪塔の一部と龍宮石、巨石があり昭和三十一年十一月富山大学の坂井教授は

鎌倉時代の出来で荘司宅である、遺跡の自体に価値があり保存すべきである。

と鑑定している。また園内(三島神社)には佐野源左衛門常世の守護神鎮座する。明治三十五年十一月常世の七百年祭(六五〇年祭の誤りか)をこの地で行い「遺芳」従三位勲一等佐野常民と書いた額を佐野家より贈られている。佐野神社に掲げられた「諏訪宮」の額は俵藤太藤原秀郷末裔佐野源左衛門藤原常世系譜二十五世佐野伝四郎原年次敬白として奉納したものである(嘉永六年癸五、九月吉祥日)

「先達録」によれば

源左衛門(或は子孫)が地頭をしてきた桜井庄七千貫文(一貫二反歩)をたまわつた

とあり此事は同地文化に関係があり、当地は辻道場を中心として門前市として発展後に桜井庄として天神社が附近の総社であり往古この辺が栄えて

ヲ奉シ一字ヲ建立シ西徳坊ト号セリ。

こゝの西徳寺にも「西徳寺縁起」があり、それによると「鉢木」のことが記されているが、内容の概要は、

大雪にあつて咫尺を弁せず、源左衛門が家に辿りついて一夜の宿をたのんだところ、ようこそとて宿をした、辿りついたのは一つの光明を頼りに訪れたのである、この光明は即ち観音像の靈現であつたという。

「三州志来因概覽」については前にも書いたが、この巻之六には「鉢木」について次の様に伝えている。

統本朝通鑑第百二日北条時頼号最明寺道崇一名実心、弘長三年十一月、為行脚僧、而微行諸国到信濃佐野、逢雪宿、佐野左衛門常世、伐盆樹梅桜松扶寒凍、最明寺感其志、扇鎌倉而授加賀梅田、越中桜井、上野松枝三邑於常世トアリ、此事演劇中鉢樹記詞ニ伝播スルノミニテ明確ナラス其上東鑑ヲ考ルニ弘長三年十一月二十二日ニ時頼於最明寺北ニテ卒去トアレバ亡論然レトモ日本史及大鏡太平記、康元年時頼嬰病薙髮

法名道崇号覺了坊嚮創最明寺於内山(中略)

周巡諸國觀風俗訪民疾苦、如有人抱冤結者、功問(下略)又舉撰州難波浦老尼之事以て推量スレハ常世ノコト弘長三年十一月ニハナクトモ時頼行脚中全ク此事ナシトモ不可言也、梅田ハ河北郡五箇庄内ノ村名也、松井ハ越中礪波郡ノ中古ノ郷名タルヤ同社編志等ニ松井郷見ユレトモ今ノ郷名ニハナシ、三日市辺ト馬淵カ混目抄ニ記セリ

昭和十二年三月十九日の富山タイムスに
さても珍らしや佐野常世の後裔当主清太郎氏に
聞く、由緒深い宝蔵仏や長槍も佐野村に現存し
云々

昭和二十六年七月三日の北日本新聞では
五〇〇年前文永十年八月三十日に七九才で同地
に『鉢の木』の後裔がいたが同地に没するまで
開墾に従事していた。

常世安養寺を焼払う

面白いのは大正十三年一月金子安次郎著中田書

前表ならんと人皆な唇を翻しけるが果して幾程も非らざりしに鎌倉も又亡びたり

例え時頼の命であつたと云え無慘極りなき暴挙を行つたもので、勿論その真疑の程も不明であるが事実とすれば、この時代の事であつても大事件には相違ない。尙明治二十三年の富山日朝社発行の「青構泉録」による「佐野常世安養寺をやき亡す事」によれば、

新川郡神成郷松井庄安養寺といふは安の宮御祈願所にて釈空海造主の靈場とかや、然にこの寺亡ろひし起因は仁治元年十一月北条時房相州鎌倉に薨し給ひその幼穉なるにより舎弟時頼之を補佐して政を行ひ、天下の風俗人情坐ながら知りかたきを愁ひ康元元年入道し最明寺と号す、其より辺土遠国を行脚し給へり、然るに正元二年の冬越中に至り、嚴冬の事なれば風雪寒に堪へかたく安養寺をたのみ暫く逗留せんと尋ね求めて寺僧に乞ひ給ふ(中略)大僧正隆範上洛中不在、僧侶許さず……監守一夜をかしたが其夜盜賊ありて了源僧都を殺し難僧を縛り、貨宝を奪ふ……盜人一人とらえて責め糺し、今宵の坊

店発行の「越中史料喚起泉達録」の中にある「佐野源左衛門尉常世安養寺を焼払ふ事」という記録でこれは高崎地方の史家にとつても初耳のことである。

最明寺時頼は当国を出て上野国に暫く止り、夫より鎌倉に下向し玉ひ安養寺の僧徒難面く振舞へしを深く憤り此寺破却すべしと、即ち安養寺の所領神成庄、松井庄共に一円に没収し、松井庄を佐野源左衛門尉常世に宛行なはれて越中大坊を破毀すべき旨を曰ふ、常世是を承り、本国上野の人数三百人を率ひ來り正元三年四月不日に安養寺に押入隆筑僧正を始め僧百七十員、地下塔司僧侶百三十余人悉滅取し隆筑並に職分之者を残し置き其余は一々首を刎ねたりけり本坊並に百二十余ヶ寺塔司に火をかければ折節谷風烈しくして大門鳥居二階門金剛力士の二尊五十九間の廻廊宝藏鐘樓竈殿綵角護法の大院十三ヶ所樓閣院々七十余宇、佛像神体経論聖教忽ちに寂滅の煙と立上る、真言秘密の大伽藍只一時に灰燼と成りたるは情無こそ聞へける……罪一人に帰すならば偏に時頼之武道の尽きぬへき

主かと……答へず、最明寺を敵しく責めたが罪なし、程なくして盜人白状、盜人を斬殺す、翰回僧尙疑つて最明寺を殺さんとしたが老僧之を止めた。翰回衣をはきて追出せり、村老一棉衣を与へしが鎌倉さして下る、時に上毛国佐野源左衛門常世に立寄り、安養寺僧侶の暴虐を憤り常世に焼払へと命した、正元三年常世手勢を率い、安養寺に押入隆範阿闍梨……のこらず搦め捕り、一々首を刎ね、火をはなち、さしもの伽藍一時に灰燼云々

最明寺安養寺の難に守袋と笛を失ひ給ふ、守と三島の神に授りたもう鱗(龍鱗三枚)は北条家の至宝、青木左内拾ひ、伊勢新九郎に伝ふ、笛は徹城僧珍重し、古国府勝興寺に伝ふ、頼朝卿愛せられし蛻蟬といふ管なり

こゝにある安養寺というのは、新川郡熊野川辺にある安養寺村であり、こゝに安養寺があつたが、今は寺跡のあるだけである。又越中の大坊安養寺というのがあり、古国府勝興寺のことである。神保井波安養寺瑞泉寺などと礪波せんだんのにあり柴田勝家一向宗一揆平ぐる時越中安養寺を

こして能州へ赴く、石動より一里余南に土山……ここに安養寺跡あり勝興寺は即土山にあつた安養寺

別記中にある常世に關し黒部市教育委員会の森田喜代太郎の調査によると次の通りである。

一、佐野は元、現高岡市に近接した農村で、近年高岡市に編入されて、高岡市佐野となつています。三日市との連関であればと思ひ、以前から探していますが見当りません。三日市は本県下新川郡三日市町（昭和十五年二六〇〇年記念に桜井町となり昭和二十九年更に黒部市制実施により只今は黒部市三日市）

当地を古くから桜井といわれ、謡曲により佐野常世公に賜つてから当三日市に莊館あり（莊館地の一部現存）常世公地頭となつて赴任されたと云い伝えがあるが、高岡市の桜井吉太郎さんでは常世公の三人の子息の内一人が任地へいかれたともいわる。尙常世公の一族が、守り本尊観音様が現に当市西徳寺に古仏として現存、八心大市比古神社に常世公お祀りもあつた祠あり三日市には佐野屋佐之助、堀平右衛門、田舎に

広瀬という当時佐野家の家臣があつて只今もその子孫が現存しておられるか詳細不明です。

一、佐野神社は高岡市佐野（村）にあり、元諏訪宮といひ、常世公子孫が佐野村開拓の折より奉祀されたもの、後に佐野神社といわれている。

この設立年月日は桜井吉太郎氏にも照会したが確答を得ません。

一、安養寺の焼払いの件は御同様大いに興味あることですが、安養寺の位置にも前小生研究録にかいてありますように二、三カ所も異説があつて礪波方面の田の中に跡ありというもの、今の伏木勝興寺がそれであるとの説があり、安養寺事件があつたとすれば、時頼公が越中まで来られたことになる。時頼公のこられたことが事実とすれば、更に史跡に一異彩が放たれるわけで、今後御教示を願います。尙礪波とは安念なる姓なり、この出処について照会中なり。

常世の祖先

黒部市教育委員会が昭和三十一年十月に発行し

た「佐野源左衛門尉常世史跡三本柿について」によると、三日市に常世の遺蹟があり、安養寺の焼払事件まであつたと伝えて居るのみならず、この街に桜井清太郎氏というものが居り、この方が佐野常世の後裔であると同地では認めている。即ち今後裔とされているものに、

栃木県佐野郡唐沢山神社宮司 佐野五郎

東京都太田区馬込町四丁目五六 佐野常羽

（現常光）

富山県高岡市佐野一八一八 桜井清太郎

この三家のうち佐野五郎氏は直系と称され、系譜等は「唐沢山神社創建誌」にもあり、桜井清太郎氏のもつ系譜書の写にも次の様にある。この写には第二十七世主佐野健次郎と書かれ

先祖は田原藤太秀郷の第六代（此所虫食不明或は第十六代か）にして、実子三人あり、其内末子が野州佐野源左衛門尉藤原の常世なり。

此時北条五代將軍時頼入道北国廻国の砌仔細ありて三ヶ庄を給ふ候こと、上杉謙信越中攻入の砌迄領す。野州、越州両先祖にして越州雄上野郷（今の村郷、頭川、上、下諏訪）の佐野四個

領の開主、此処の氏神諏訪明神は源左衛門代々守護神とす。右代々守護神稻荷明神は、文永年間尾張国名古屋、時の城主の守護神稻荷明神と自ら刻ませ給ふ像にして仔細ありて佐野家の守護神と尊み重宝の書類等存在せしも再三水難の爲め流破せり。

加賀の城主二代利長候御鷹野の砌十八代姉うめ年十四才にして仔細ありて（馬術に妙を得たりしこと）佐野の源原三十石賜ふ候ことあり。

自ら（色紙に梅の折枝を画き短冊に佐野莊三人扶持取らせ申候）筆を執り如斯書蹟にてしたゝめて下し置かれ、

此書附は明治二十二年頃に磯野光繼の口頭に懸り、富山市和泉町質店に入質せり。

初代より二十一代迄代々源左衛門と名乗り、二十二代より二十六代迄伝四郎と名乗り、

初代より二十一代迄佐野村に居住し越中国佐野村に先祖代々の墓所に納骨あり、確標として杉樹（老樹にて枯れ今の杉は植替せしもの）植付あり二十二代の次男を分家し佐野八左衛門と称して、右佐野村に残し、二十二代より六渡寺村

へ移住せり、而て二十二代より六渡寺の墓所に納骨しあり、二十六代の時六渡寺村より明治十四年九月二十九日に富山市に移転す。

代々系統相續きは迄一人として養子無之、礪波郡芹谷山光寺に安置し給ふ、觀世音菩薩は昔仔細ありて、六渡寺の海中に沈みしことあり其後三箇年間当家に靈祭し誰言ふとなく、芹谷の觀音と聞きし為め該寺に納置し現今にても安置しあり。

右の台座は当家より寄附せしものにして、三重に作り源左衛門と記入しあり。

この桜井清太郎家系譜の五枚目には問題の常世のことが載せられている。

益樹舎歴代過去録姓名拔書扣、野州城主、佐野源左衛門之尉藤原常世入道幼名松千代丸、

先祖天徳寺普門房公賢大居士年令七十九才、文永十一卯戌年八月二十日、

先祖野州城主佐野源左衛門尉藤原常世入道也、野州越州両先祖なり、公達二人息女一人桜姫と云ふ、

野州佐野城主二代善左衛門と云一男梅太郎なり

たと伝えている。

常世一族の守り本尊觀音様が現在三日市西徳寺にあり古仏として知られ、又八心大市比古神社に常世を祀つたという祠もある。更に佐野常羽氏を訪問した人の話が「桜井庄と佐野源左衛門尉常世について」の中に次の様にのせられている。

源左衛門は鎌倉よりの帰途藤沢の辺で暗殺された、従つて源左衛門は桜井の庄を統治したことはない。常世公の直系は唐沢山神社宮司家で、佐野伯爵家は常世公四代前より分れたものといわれている。佐野家は三代將軍に亡ぼされた。源左衛門の定紋はアゲへの蝶であり、長崎で医学を勉強し侍医として鍋島家へ仕へた。

また明治四十五年四月二十五日川俣久平編纂の「唐沢山神社創建誌」による佐野家系譜は次の様なものである。

大職冠鎌足公八代裔

從四位田原藤太、初め下野押領使後下野武蔵兩國の守に任し鎮守府將軍に拜す（こゝでいう押領使とは当時の軍事警察を担当する役）

一、秀郷、正暦二年辛卯九月二十五日薨去、御

二男松太郎なり、越州雄上野郷主予故郷今の村号佐野、四ヶ領の開主なり、二代善左衛門（省略）

正応元戊子年二月十五日、鉢木領主佐野善右門二是一院殿智賢哲大居士

藤原市綱幼名梅太郎年令八十才（以下省略）

この系譜はずつと続いているが、富山県佐野村にある佐野神社に嘉永六年癸丑九月に二十五世佐野伝四郎から奉納されてあつたが、その後大震災にあつたので、この写は役場へ送られて、再び桜井清太郎が保管する様になつた（昭和三十年十月調）桜井清太郎は第二十七世主であり、佐野村役場に勤務して居り、この一家である高岡市の桜井吉太郎といふ方の説では、

常世には三人の子息がありこの内一人が任地へいかれた。

とも云われ、三日市には佐野屋佐之助並広瀬源左衛門（田家地区神谷）という源左衛門に仕えていた遺族が現存している。現在は佐之助は梅沢と改名し、現主は養子で直次郎と称している。また、堀平右衛門や広瀬氏も祖先は源左衛門の臣であつ

寿巷百老歳（西暦九九一年、平安時代）大同山東明寺に葬、東明寺殿野州大守東秀関郷大居士と諡す。後世田原八幡宮と崇祀す。

從四位上、田原左衛門尉、鎮守府將軍に拜す。

（二代より九代まで中略）

十、忠綱（建久五年甲寅五月六日逝去（一一九四）佐野讃岐守以下佐野姓となる（東国院殿野州大守功山忠綱大禪定門）

士、成俊、元暦元年甲辰十二月五日逝去、佐野

中宮亮（東明院殿野州大守七宝義觀大禪定門）

士、有綱、文治二年丙午六月朔日逝去、佐野太

郎大夫安房守（忠正院殿前白有綱大禪定門）

士、基綱、曆仁元年戊戌四月九日逝去（一二三

八年）從五位佐野安房守（安藏寺殿風山源了大居士）

高、国綱、文永二年甲子五月十一日逝去（一二

六四年）佐野安房守小太郎左衛門尉（権道寺殿

明岩清光大居士）

士、実綱、弘安九年丁亥正月三日逝去（一二二

六年）佐野越前守左衛門尉（浄光院殿義光玄正

大居士）

(十六代より四十三代まで中略)

四子、益子、実は佐野常樹末女養父卿卒去につき家督を相続す(明治三十九年一月廿一日、前代卿逝去につき相続)

フヂ子 明治四十四年養女となる。

唐沢山神社宮司、当主佐野五郎氏が四十五代となる訳けであらう。

右佐野家系譜古代の儘伝来せし処周防守昌綱の代に至り唐沢城兵火に罹り焼亡し、写を以て伝ふ、而るに天和二年修理大夫正行禁裏御附勤仕の節、愛宕宰相道福御執奏にて供叙覧処御感淺からず蒙勅誼難波中納言宗量卿書写外題近衛左大臣基熙公筆記且系図表装に致すべく旨にて太神宮御衣の錦を賜はるの一大光栄を得爾来叙覧系図の名世に益々高くなるに至れり、真に武門の冥加とや謂はん。

右愛宕宰相の執奏状は系図に添て伝来す。

昭和二十八年十二月平凡社發行下中弥三郎著「大人名事典」第三卷による佐野家を調べて見ると

佐野氏忠、下野国佐野の城主北条左京大夫氏康の五子に生る。宗綱討死の後(中略)氏忠入り

と佐野家との関係と祖先が田原藤太秀郷である点だけを述べて居る。佐野城主の佐野家が秀郷の後裔であることは事実で、市勢要覧の中でもその事にふれている。

秀郷は平安時代東国の豪族左大臣魚名の後で、下野大椽村雄の子(中略)下野国佐野に居住し武名を遠近に轟かせた。天慶三年平将門の叛するに及びこれを誅し功により下野守に任ぜられた。子孫は東国地方に繁衍し、互理、小山、結城、下河部の諸氏となり世に秀郷流といふ。

以上は「大人名事典」からぬいたものであるが、何れにしても、常世との関係に深く結びつく様な事実は発見出来ない。

墓地が葛生にある

栃木県安蘇郡葛生町教育委員会調査の常世に関するものには注目すべきものがある。殊に葛生町こそ源左衛門の本拠であり『鉢木』の古事も葛生町の出来ごとであり、且つ源左衛門の墓地までであると報告して来ている。

て嗣となり、その女を室とした。天正十八年豊臣秀吉の小田原に発向のとき、氏忠は小田原城に籠り、家臣をして佐野城を守らしめたところ秀吉(中略)氏忠の家臣等を謀はしめた(中略)遂に落城し氏忠のち氏直に従ひ高野山に赴き、のち伊豆に至り死す。

佐野房綱(一六〇一)徳川初期の下野佐野城主宗綱の叔父(中略)大貫越中守某を攻めて佐野城を乗取り、これにより小田原凱旋ののち秀吉より佐野の旧領を賜はつた(下略)

佐野宗綱(一五六〇—一五八五)下野佐野城主永祿三年生る。昌綱の子、天正十二年十二月晦日夜、上野館林城主長尾但馬守頭長のため所領彦間城を襲ひとられしを憤り、翌正月元日朝宗綱只一騎にて彼城に駆せ向ふ(後略)

佐野基綱、下野佐野領主、佐野太郎と称し足利有綱の子である鎌倉に仕ふ(下略)

この基綱は、のちに出て来るが実綱の祖父で、常世の祖となつて居る。

昭和三十年発行の「佐野市勢要覧」には佐野源左衛門の事については一言もふれて居らず、唐沢山

一、佐野源左衛門常世の墓地所在地、葛生町桜井町願成寺

一、墓の文字、建立年代、建立者氏名詳かでないが、今寺に常世の位牌があつて、位牌には「仏手院殿一山同覺居士建長六年五月七日」とあり、尙お同墓地には常世の母と妹の墓がある。

更に常世の館跡は当町常盤地区豊代大内にあつて百八十間余畧、壁塹濠が残つて居ります。地内に実相院という小寺があつて常世の守本尊薬師如来及地藏尊があり常世の位牌(願成寺にあるものと同じだから略す)及び母の位牌「正雲院殿山室妙花大姉」と源左衛門常世愛用の花瓶(中国より渡来したもの)と称せらるゝとがあるが実相院は明治四年廃寺となつた。また地内西北隅に常世の守神として崇敬したという矢越天神がある。

一、佐野源左衛門の子孫とその系譜

常世は藤原秀郷公の子孫佐野家の一族で前記願成寺は佐野家の祈願寺と云われ、同寺には佐野家の系譜があつたが今は佐野常光氏(元伯爵佐

野常羽氏息)家へいつているという。常世の子孫が現存しているということはわからないが佐野家の直裔は唐沢山神社宮司佐野五郎氏である一、『鉢の木』の事蹟について

最明寺時頼が諸国行脚で訪ねたのは前記豊代大内の館でその時鉢の木のもてなしをしたと伝えられ、謡曲『鉢の木』中に出てくる「山本の里」は当葛生町の古名である。詳細は人口に喰ひやくされてから省略いたします。

一、尙お常世について少しく詳記すれば次の通りという。佐野源左衛門常世は仁治二年辛丑正月下野国安蘇郡春日岡に生まれ、父は佐野上野守常春、母は玉笹と称して世録三千貫を領していたが、五才の時母に死別し継母に育てられて十六才のとき元服し鎌倉幕府に出仕する途上継母のたくみによつて下僕勇助に暗殺される所を難を免かれ出家した。それから諸国を遍歴したまゝ信州の山中で勇助とめぐり合い、継母の重病を知り孝養をつくすのはこの時と甲州路をいそぐ路すがら山賊に出合い、この山賊を刺す際身の上をきゝ父上野守が北条家の御藏番をして

ず、後代のものが作つたものであろう。

佐野源左衛門常世が栃木県佐野に生れ、従つて『鉢木』の事実も、下野の佐野で起つたことであるとは、従来下野側が長い間叫んで来たことであり「下野の昔噺」でもその著者の小林辰悟が、『鉢木』は下野だと(後記)力説している。その内容は、葛生町教育委員会調査のものと殆ど同一であり、源左衛門も佐野のものであり、『鉢木』の事実も下野の佐野で起つたことであり、佐野の「船橋」も下野だと云つている。

願成寺にある文獻

足利の友人から寄せられた昭和十一年十二月発行飯島光之丞編による「葛生町勢發達史」を調べに見ると

葛生町の往古は文獻に徴すべきものなく随つて正鶴を捕捉し難きも口碑によれば麻生の野の「山本の里」と称し人跡稀なる山嶽に開繞された原野一帯に青つづら(葛の類)生ひ茂りその中に人家点々と散在したるに過ぎず(慶長年間)

いたとき、家宝笹波の劍を紛失したその盜賊が今の山賊であることを知り、その仔細を路傍に記して野州に急いだが、時既におそく継母は黄泉の客になつていたので霊を懇ろにとむらい正雲寺(当時常盤地区豊代大内)にすむ。

その後最明寺時頼が甲州の民状視察の折、例の立札を見て鉢の木の一夜を明した次第であります。その後一且鎌倉の功あつて六万三千石の本領に加えて加賀の梅の庄、越中の桜井の庄、上州の松井田の庄を受領した。その後常世は小田原に居城し北条氏に忠勤をつくしたが、元享三年癸亥五月七日小田原城に帰る途中、馬入川の濁水のため馬諸共に水死したそうである。墓地には常世と母と妹の墓があります。

常世の『鉢木』の古事は、上州の佐野でなく下野の葛生の里であり、常世の墓地も位牌も立派に現存していると以上の様に述べていることは極めて注目すべき事であるが、位牌の建長六年は一二五四年で馬入川で水死したというのが元享三年の二三三年の二説となるが、生れたのが仁治二年一二四一年とあるから、こゝにある位牌は信が置け

皇紀一九七一年)はじめて葛生なるものを結成せしものゝ如く、新選六帖源為家の歌にも

我が恋は安蘇山本の青つづら

夏野を広み今盛りなり

と詠じたる記録あり、また歌枕名寄匡房卿の歌

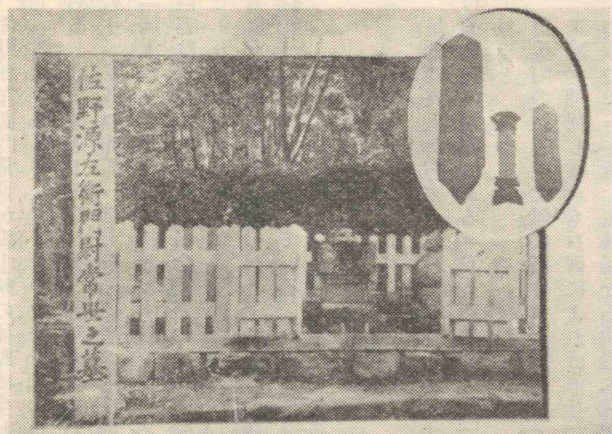
山本の左野の舟橋なか／＼に

楽しくことを言ひわたる哉

とある辺より推測すれば、この左野の舟橋は現在の葛生町松井町の西北方、古越路山麓を高さより低きに流れし安蘇の河原の傍らに船弁天宮の祠あり偶然それを目撃して感激の余り一首を詠じたものが後世に伝はりしものゝ如くであるこゝが山本の里も舟橋も葛生に関係があると注目すべきことがのせられて他、佐野常世の墓もあると次の様に述べている。

佐野源左衛門常世は仁治二年辛丑(皇紀一九〇一年)正月下野国安蘇郡佐野春日岡に生る。父は佐野上野守常春実母は、玉笹と称し世録三千貫を領す。常世五才の時実母に死別し継母まきに育てられ十六才の時元服鎌倉幕府に出仕せん

と下僕勇助を伴ひ武蔵野原の観音堂に一泊す。



墓地と位牌

より先き継母まきは下僕勇助に命じ常世を途中に

番を勤めし時北条家の家宝笹波の劍紛失しその責を負ひ退きたるがその盜賊こそはこの山賊にして劍は建長寺の二階に隠匿しある由を自白し徒容と死につく、計らずも父の仇敵を討ちしたため仔細を立札に認め急ぐ、野州に戻りしが今や母は黄泉の客となり悲嘆に暮れ懇ろに回向をなす。当時北条時頼は出家し建長寺内に最明寺を建て甲州路の民情を視察するや常世の立札を発見、大いに感激その後を追ふ。常世はその後正雲寺の草廬にあり、頃しも正月の夕まぐれ大雪降つて歩行困難の時外出より帰れば妻の白妙今し方一人の出家わが家に訪れ一夜の宿を乞ひしが主人留守のため断つた由を聞きそれは遺憾千万直ちに追っかけ母の回向を頼まんと命ずれば妻は雪の中を走り出し、五六丁先き迄追ひかけ出家を呼び戻し一泊を勧む。諸国行脚の北条時頼は身分を秘めて家の中へ入り、様子如何にと窺へば唯だあるものは瘦馬一頭と古鎧のみ、然し床に飾りし鉢植の梅の木を剪り嚴寒を防ぐ用意をなせるに深く感激情をこめて姓名と事情を名乗らしめんとするも、常世は名もなき馬方渡世のものなりとのみ告げ零落の身の上を語らぬ

邀し殺害の謀を授く。熟睡せる常世の寢息を窺ひつゝあつた勇助は絶好の機至れりと太刀を抜き放ち、一刀のもとに斬り殺さんとした処常世は沈着にも勇助の右腕を握り締めその事情を訊く、時に常世は継母の心中を洞察して即座に髪を切り下げて坊主頭となり守袋と肌着襦袢を勇助に渡し「余は鎌倉出仕を思ひ止むるに付此の片見の三品を母に差上げ使命を果した旨を告げよ」と述べ国許へ帰す、勇助は片見をまきに示し常世の死骸は隅田川へ投棄した由を告ぐるや父の常春は嘆きの余り正雲寺の百五十貫文莊園に移り住む。その片見の品を葬りしが今に遺る常世の墓なり。佐野源左衛門常世は出家の姿となり妻の白妙を伴ひ諸国を遍歴三十余年を経過するうち信州の山中にて偶然勇助と邂逅其後の事情を聞き継母の重病を知る。斯くて孝養を尽すはこの時ばかりと急ぎ甲州路の山奥に差しかゝるや妻の白妙持病の癪に苦しむを見谷底に水汲に赴くや山賊現れ白妙をその棲家に連れ行く常世は現場に戻りその有様を知り、山賊を追ひ一騎打をなし最後の駐めを刺さんとする際身の上を打開く、それによれば父上北条家に仕へ御藏

時頼益々感極まり珠数を切断他言せぬと誓ひ問ひ詰めれば余儀なく常世は前半生を物語り「一旦鎌倉に事あらばこの馬に馳せ参じ、功を樹て宿志を遂げんとす故に兵具のみは棄てぬなり」と答ふ。斯くて時日は過ぎたる或る日鎌倉より軍兵を招く旨の通牒に接し常世は寸刻を待たず武裝して鎌倉に長駆す。然るに世は泰平にして乱の気配なくば呆然と所々を騒げ廻る。その中幕府に呼び上げられ時頼と面接せるに「曾て汝が家に宿せしは我なり、今や無事なるも兵を招くと見せしは汝の精神を試さんが為めなり、依而六萬三千石の本領に復し、更に加賀の梅田の庄、越中の桜の庄、上州の松井田の庄を加へ以て鉢植の恩に酬ひん」といふ出世美談、其後佐野源左衛門常世は小田原に居城を構え北条氏のため忠勤を擢んぜしも元享三年癸亥（皇紀一九八三年）五月七日小田原城へ赴く途中馬入川の濁水にて水死す。行年八十二才今も尙葛生町松井町の願成寺境内に佐野常世及母と妹との三墓碑並に仏手院殿一山道覚居士の位牌を安置す。また安蘇郡常盤村大字豊代の代ノ内に源左衛門の屋敷跡がある。

常世をめぐる物語りはまた変化を見せたが、葛生町教育委員会調査のものとは異つてはいない。また問題の願成寺についても常世の關係を次の様に述べている。

梅秀山願成寺は葛生町松井町に在り臨濟宗報恩寺の末寺、宝龜年間（皇紀一四三〇年）下野守河辺左大臣藤原公檀越となり創立（中略）因て秀郷公を開基と称す。寛仁四年庚申（皇紀一六八〇年）秀郷公の後裔下野權守足利家綱公、修補を行ひ、再興尋て黒仁田朝日長者の室正願尼、仙賀夕日長者の室正雲尼兩聖御前當時に入り得度、降つて鎌倉幕府の時代文治二年丙午（皇紀一八四六年）伽藍を松之内の下に移し建つ當時よりこの地を山本の願成寺と称す。宝治元年丁未（皇紀一九〇七年）六月佐野源左衛門尉実綱、三浦若狭の前司泰村に通じ北条氏を謀りし事蹟はれ法華堂に自尽す。為めに所領を失ひ衰微に陥りしが佐野源左衛門住せし以来釈迦仏を信仰隆盛を期し建長年間（皇紀九〇九年）佐野源左衛門尉成綱と謀り其十二坊を定む。此の時東明寺中興開山大覚禪願成寺住職となり臨濟

宗に改め梅秀山と号す。田原佐野足利三家の位牌を安置勸行す（後略）

以上で知れる様に願成寺には源左衛門が移り住んだともあり、また船橋の悲恋に大きな關係がある朝日の長者、夕日の長者のそれ／＼の室が現われて来て問題を投げている。この朝日の長者並に夕日の長者については同書のうちに仙賀城墟というのが葛生町の北方勢ヶ窪、古名仙賀沢山の頂上にあるこの記事中に

方百間西南隅を正門となす、城外に河合郭杉郭と称する外郭の遺址あり、延長共に百五間その南方に松の内郭と称するあり、縦百間横八十五間石壁各所に存在す、本城は朝日長者太田權頭行政の弟大河戸四郎行光の築城なり、行光は夕日長者と称し後世を黒仁田と改めその子孫更に葛生と改姓数代在城の後廢城となる。とあり、また願成寺什物として別に次の様に記している。

長曆三年己卯（皇紀一六九九年）朝日長者太田權守行高の嫡男朝日丸（十七）と夕日長者大河戸四郎行光の嫡女於並（十六）は兼て恋慕の仲

なりしが添へ遂げられぬ境遇を夢み兒ヶ淵に飛び込み水死をした。以来その靈魂二十二尋の大蛇の姿に変わり屢々現れて上佐野の谷々峰々を渡り

果ては山本の里を荒すため願成寺住職大覚禪師は男龍、女龍の靈魂に教誨する処ありしたため追の大蛇も成仏し牙のみを残し消え失す。之の牙を寺の什物とせるが弘治二年丙辰（皇紀二二一六年）願成寺炎上して現在は何の片影も認めず朝日の長者、夕日の長者の両家をめぐる船橋の悲恋が高崎に口伝されているものと内容こそ少し異つているが、栃木にも船橋の物語りのあることを力説して居る。しかもその物語りが平安朝の長暦三年（西歴一〇三九年）とはつきり年代が記入されていることが注目される。

この様に『鉢木』も船橋も同じ佐野という地名をもつ上州と下州にその物語りが口伝されて、いつの世にも問題を起していたものと思えるが「上毛及上毛人」大正十四年版のうち「佐野源左衛門の墓地」として次の紀行文がのせられている。

野州葛生町願成寺境内にある佐野源左衛門常世の墓の絵葉書に左の通り書添えて丸山兄より寄

せられた。想ふに上州の佐野も下州の佐野も共に佐野氏の領地で死後分骨して墓碑の如きも二ヶ所に建てたかも知れぬ。

「表記の如く源左衛門の墓なるものは、時代相當の断片もあり板碑の如き文字は不明なれど可なり大きく、又経石の新らしいのも発見、古瓦も鎌倉時代のもの出土し、土塁も少し離れて残存し、之れは源左衛門屋敷と称して居れり、謡曲にて有名だけ御地方の佐野と本家争ひ地方伝説は面白く存候（十二月八日朝佐野駅にて瓦全）」この手紙は豊国学堂に丸山瓦全という方より差し出されたもので、豊国はこゝで墓碑が二ヶ所に建てられたのかも知れないと云つて居る。注目すべき言である。

「船橋」も「鉢木」も

栃木という

「葛生町勢登達史」によれば以上の様に「船橋」も「鉢木」も下州のものだと云つて居るが、昭和三十一年九月発行した萩原進著「上毛裏かえ史」

のなかに「佐野源左衛門は栃木県」として次のことが書かれている。

謡曲『鉢の木』に出てくる佐野源左衛門常世は上州人は高崎だと思つているし、また万葉集の上野国歌の「上毛野佐野の舟橋取りはなし親はさくれど吾はさがるがへ」という歌も、高崎の佐野だと思つている。ところが先日栃木県に出張した時に書店で買い求めた「下野の昔噺」という本を見ると、驚くなかれ、片つ端から栃木県だとしている。小林晨悟さんという著者は一度会つたことのある人であるが（中略）先づこの人は佐野の地域をくりかえし安中近くと記している（中略）常世は実在の人物で、葛生町の松井町に墓があり、その宅跡が少し北の常盤村の正雲寺という家並の西裏にあり、傍の草堂に源左衛門夫妻と子との三人の位牌というのを残している。こう主張し（中略）例の万葉集の「上毛野佐野の舟橋取り離し」の舟橋が佐野の中川にかかつていたのからヒントを得たのだという。源左衛門に感じて三十余郷を復してやつた豪族は下野氏で安中町の方にはそんな豪族は居

の北岸たといふことである。佐野源左衛門が居たのはこゝだといはれて居る。烏川は鉢木の道行の碓氷川が合流する川である。

『鉢木』が栃木県でなく、上州の高崎だといふことは云つて小林晨悟の「下野の昔噺」を否定した感がある。また昭和二十五年発行の荻原進の「上州一風と人」のうちに「人国記」のことが述べられ鎌倉武士と佐野源左衛門常世のことがとりあげられている。

（前略）このことは歴史家が早くに疑問として居るところであるが、とに角話はそういう事になつて居る。この時最明寺入道が視察した結果を「人国記」として世に書きのこしたといわれる。この人国記についてはすでに歴史家は偽書であるといつて居るが、諸国の人情風俗をいかにも鋭く観察しているのに驚く（後略）

「人国記」は後代のものゝ偽作だとも云われているが、その内容はなか／＼鋭く、問題は最明寺が遊歴したことが果して有るかないかに、こゝではしぼられて来る訳で、その様な事実がないとすれば『鉢木』の影が極めてうすれて伝説、戯曲説が

なかつたと思ふとか、梅松楼の鉢の木に因んだ松井田が安中町の近くにあるからといつて謡曲が安中近くだとするのは性急だという。首尾一貫しない立論の方法をとられている。佐野の舟橋は安中町の近くなどでなく、現在の足利郡吾妻村大字高橋にかけられてあつた高橋ではないかというのである。万葉集に上毛野とあるいくつかを下毛野の誤りだとしているし（後略）昭和三十一年三月号の「ホト、ギス」に真下喜太郎が佐野について次の様に書いている。

今日佐野と云うと栃木県の佐野が機業地とし又国鉄両毛線の駅として考えられるが、佐野は他にもあるのであります。万葉集

上毛野佐野の荃立折りはやし吾は待たむ多今年来ずとも

と詠まれ、この佐野は上野である。お能の『鉢木』でも「墨の衣の碓氷川下す筏の板鼻や佐野のわたりに著きにけり」とうたはれ、この道行は信州を出て上州に著く道筋である。この万葉や鉢の木の佐野は現在群馬県高崎市の南、烏川

有力となる訳である。

舟橋については宗長法師の紀行文を見ると下野の佐野で、万葉の佐野田の稲とよめる舟橋もこのあたりなるべしと云つて居る。そこで『鉢木』の源左衛門も舟橋の古事も栃木県の佐野が本家だと栃木県側は主張しているが、明治四十三年に発行した「上野国志」の中で、著者新田郡世良田村毛呂権蔵は次の様に書いているが、この文献は弘く「佐野記」「万葉集上野国歌」「六国史上野之事蹟抄出」その他幾多の古書より得ていると裏書きしている。

「高崎の東、倉賀野の西、烏川の南に佐野村あり、土人相伝、舟橋ありし処なり、舟橋を繋し岩なりとて、河岸に石あり、佐野田もこの処なりと、堯恵紀行に十一月五日には（文明十八年）佐野の舟橋に至りぬ藤原定信をしるべとせり。

彼所を見るに、西方に一才ち平かなる岡あり、うへは白雲山、並に荒船御社の山あり、その北に浅間の嶽崖巍たり、舟橋は昔は向ふの東西の岸とおほしきあひた田の面遙に平々たり、西岸に二所の長者ありとなり、此辺の老人出てく昔

の跡を教ゆるに、水もなく細き江の状有りて二三尺はかりなる石を打わたせり、枯たる原に見わたされて、其処と思ふ所なし、跡もなく昔を繋ぐ舟橋は、たゞ言の葉の佐野の冬原」これに依てみれば佐野の舟橋の跡は流も渴きて名のみ残れりと見ゆ、今鳥川を指て云は、後人の偽造せるものならん、又説に舟橋も佐野田も下野の佐野なりと云、今に佐野に中川と云川あり、舟橋と云村あり、宗長法師の紀行には下野の国の由見ゆ、其紀行に云、下野の国へ立出佐野小太郎泰綱亭にして朝露はさりけなき夜の野分哉、此所は萬葉に佐野田の稻とよめり舟橋も此あたりなるべし 又伝船橋を見にとて、彼是打つれてまかりたりし、誠に舟橋かけ渡しけん跡見へてはるかかの山本なり、其あたりの里の名、ふる恋路と云あり、中へたてけん事も、哀にぞ覚へ侍る、伴なふ人々一首つゝなどいふに、面影は今も昔の名もしるく聞渡りこし、佐野の舟橋昔の舟橋更に目の前の様なれば成べし、舟橋の有けんと云里に云々とあり、これ享祿年中の紀行なり、されども古書上野とあれば此地なること

決定なり(中略)二条家説に此舟橋は常に渡して在るにもあらず、又川にもあらず、両方は水田にて中に道あり、然るに雨など降りて四月五月の長雨の時分は此橋を取放し、夫故に浮橋の如くなれば舟橋と云なり、斯の如くに妹と我中を取放さるゝと説しまでの事なり。
佐野の中川と云、下野の佐野にあり、然れども古来上野の名所とす、但し上野の佐野の中川は前に云が如く、田間の停水にして、舟橋を架せしものなり、下野の中川は大なり川なり、唯同名なるべし、又田間に板橋を架する事歌にもよめり、堀川百首に匡房「早苗とる深田に渡す板橋のおりたつ事のさもかるき哉」又正衡の歌に「賤の男か早苗さし行板舟をおりたゝすして取早苗かな」是等可併考
舟橋のことは直接源左衛門とは関係はない様であるが「鉢木」と地域が同じでもあり、栃木の佐野との論争の中心ともなつていたので、舟橋に関する古歌を少しあさつて見よう。
東路の佐野の舟橋朽ぬとも妹し定めは通はさらめや (堀川百首 頌季)

東路の佐野の舟橋白浪の上にかよふ花の散る頃 (月清 後京極)

天の原月に漕入る心してしはやすらふ佐野の舟橋 (玉吟 家隆)

尋ねても渡らぬ中の月日経て影たえはつる佐野の舟橋 (建保百首 俊成女)

東路の雪の朝は白波の下より渡る佐野の舟橋 (正治百首 寂蓮)

東路のさのゝ舟橋いたつらに渡りしころの袖やぬれなん (家集 康元)

高根には深雪降るらし秋かけて時雨に渡る佐野の舟橋 (夫木集 為家)

波のうへを渡ると同じ名にたてと棹たてつきぬ佐野の舟橋 (千首 栄雅)

更にまた中絶はてゝ五月雨の深き跡見る佐野の舟橋 (將軍家百首 家隆)

上野のさのゝ舟橋舟ふりぬ越路の往来跡絶ぬべし (十五首三吟 宗澄)

うかりける佐野の中川さのみなと逢瀬絶へても恋渡るらん (新千載 為兼)

道辺の佐野の中川淵とのみ見るも瀬絶の五月雨

の頃 (弘長百首 寂西)

住なれし佐野の中川瀬絶して流かはるは涙なりけり (千載集 仲綱)

恋渡る佐野の舟橋かけ絶て人やりならぬ子をのみそ啼 (定家)

舟橋の悲恋を詠んだ歌人もまた歌も非常に多いがこゝではその代表的のものだけを記載することにして省略するが、宗澄などは、はつきりと上野のとまた万葉の古歌のなかみつけのと詠んでいるのも注目される。

「下野の昔嘶」を読んで居ないが、佐野の舟橋も「鉢木」の佐野も下野の佐野だとは必ずしも断定出来ないものだがこれでも知ることが出来るこの様に舟橋の悲恋が、当時は勿論後世の歌人にも注目されているのに「鉢木」のことは歌人には余り注目されて居らなかつたらしく、古歌に見られないのはどうした事であろう。

万葉集にあらわれた歌のすべてが貴族的な恋歌であつたように、此の世代の歌人には、當世の様な古武士的精神や貧しい生活は反影せず、舟橋の悲恋が大きくクローズアップして来たものと見え

る。尙昭和二年に発行された「群馬県史」による
と佐野藩（下野国安蘇郡佐野）の堀田正領撰津守
が江戸時代上野国内勢多郡と緑野郡新田郡等に一
万六千石を領していることや、ずつと昔は今の栃
木県の渡良瀬川の東岸区域も上野国であつたこと
などが記されているので、上野と下野とが混同
同されたことも事実である。

田原族譜から見た常世

常世が実在か否かは史家にとつては重大なる問
題であるが、明治十六年十一月十五日東明会が出
版した山土家左伝編集による「田原族譜」による
と次の様に佐野源左衛門常世は立派に実在したこ
とになつてゐる。

これによると秀郷の子孫はのちに亘、蒲生、
佐野、足利を始め百十七族に分れているが、その
書に納められている系譜は亘、内藤、新莊、平
泉、橋爪、泉錦戸等系、蒲生、室木、和田、小谷
儀我、松田等系、首藤、龍造寺、山内、鍋島、鎌
田、薩都那珂等及、多久村田系、左藤、後藤系、

山田、首藤、左藤系、佐藤、藤田、近藤、大友、
吉沢、田村、水谷等系、武藤、小郷等之系、佐藤
尾藤、池田、中野外島等之系、左藤、佐藤、主藤
首藤、守藤、須藤、鎌田、菱和等系、薩都、那珂
江戸、額田及桐生等系、決多野、松田、河村、広
沢等系、結城綱戸寒川山川、白川、大内等系山上
系、足利田原之系等実に六十有六といふ多くの系
譜があつて何れも繁栄を極めたものであるが、本
家である田原秀郷家の系譜の第十四代安房守左衛
門尉佐野小太郎実綱の二男景綱が即ち佐野長島市
橋、三橋田子、赤石金原等系譜となつた祖であり
この景綱は佐野小太郎入道号上佐野豊綱とも云つ
た方で、その子が小次郎秀綱、更にその子小次郎
源左衛門尉丹後守常春、その常春の子が即ち源左
衛門常世である。常春には常世、常良、常俊の三
子があつた、秀綱の下に常春、行政があり、常春
の方が源左衛門の系譜となり、行政の子孫が、市
橋、三橋系に続いている、そして佐野源左衛門系
となつた常世のあとが、成常、常行、行春で、そ
の成常の後が師常の系譜でずつと子孫連綿と続け
て常世から二十二代が即ち常昭である。

この系譜から見ても高崎市史のと異っているのは高崎市史では十代国綱、十二代常春の子が源左衛門常世となつている。国綱の子が実綱で実綱の二男景綱の子が即ち常世である。また常世の子に常高があり常之、常久、国常、元国に伝えているとあるが「田原族譜」では、常世の二子常行、常行の三子に常高があり、常之、常久、国常、元国と続いている。また高崎市史にある叔父の常景（佐藤々太経俊）はこの系譜になく「大人名辞典」にある兄正信というものも見当らない。この系譜に出る有綱は文治二年丙午六月朔日逝去して居り、基綱は暦仁元年戊戌四月九日逝去（西暦一八六六年）国綱、文永元年申子五月一日（西暦一八六四年）実綱弘安九年丁亥正月三日（西暦一八六六年）成綱、正和五年丙辰正月十一日（西暦一三六六年）に何れも死去している記録がある。しかし景綱以降常世の系譜に至る人々の死去年月日が明かにされていないのは残念である。秀郷以降の「田原系譜」と「唐沢山神社創建誌」による系譜は次の通りである。

田原系譜

一秀郷一常一公脩一頼行一兼行一成行一家綱一俊綱一忠綱一成俊一有綱一基綱一國綱一実綱一成綱（これ以降は唐沢山佐野家に至るまで続くが省略）そして第十五代実綱（従五位下安房守左衛門尉佐野小太郎）から分家して源左衛門系となる。即ち実綱の二男景綱（佐野小次郎入道号上佐野豊綱とも云う）から分家したものである。

以上の家系で常世が遠く祖先を、天御中主尊から大織冠鎌足に出で、田原藤太秀郷につき、実綱の代で分家し、田原家より佐野家を創姓したことがはつきりして来たし、常世の子孫も連綿と続いていることが立証されている。

この系譜から見ると、越中の桜井の荘を統治したという常世の後裔が、今桜井の姓を名乗つて残つていと前述したが、系譜にある桜井源次郎（淡路守）と果して関係があつたであらうか。また『鉢木』にゆかりのある地名を冠したこの桜井源次郎の他に、梅田安芸行利がいるし松枝与八郎元国もある。これ等の人々が桜の庄や梅田、松枝の各庄にそれ／＼赴任した人物であるか否かは、更に研究をすゝめる必要があるが、越中の桜井の庄

はとも角、梅田松枝については全く手がりの文献がないので、梅田松枝の両家についてはこれ以上掘り下げる方法がないのは心残りである。

この系譜では「大人名辞典」に出て来る市橋修理も出て来るし「高崎市史」にある、常世の伯父の経俊（或は常景）はこの系譜では発見出来ないが、常貞の代で、天正中徳川家に属し結城中納言秀康卿に越後に千五百を賜ったことや、その子孫である常真が京都に移り住んで、医学を修業し鍋島光茂の招きで五十石を賜ったことなど、具体的なものが盛られている。

これから判断すると架空説は全く消しとんで、信をおくことが出来れば「田原族譜」はそれ故に佐野常世家にとつては重大なる意義をもつことになるが、惜しいことは景綱・秀綱以降の年代が書き入れられて居らないことで、下野国安蘇郡唐沢山東明会なるもの出版による「田原族譜」の資料の確認もなお研究する必要があるわけである。

前に書いた「田原族譜」の森保定の跋の一部に次の事がある。

古文書から伝説がさまざまとなつたことも考えられるが、こゝに集めた資料から直ちに結論を出すことも危険であるが、時頼の出家が康元元年（西暦一二五六年）であり高崎市史による嘉禎三年（西暦一二三七年）佐野小太郎源左衛門尉が上下佐野を領して居り、その子が即ち常世で、宝治建長間（西暦一二四七年）佐野に蟄居し、鎌倉に召されたのが建長六年（西暦一二五五年）また葛生町調査による常世が仁治二年正月安蘇郡佐野春日岡に生れ（西暦一二四一年）馬入川で溺死したのが元亨三年（西暦一三三三年）五月七日であり、年代的にはそう大きなずれは認められない。

『鉢木』が能楽大辞典では謡曲として脚色されたものであろうということは前述してあるが、その作家は清次だとしてある。清次は観阿弥のことで足利時代の大芸能人である。

観阿弥（西暦一三三三年—一三八四年）元弘三年生る、三郎清次と称し、本名は結崎清次、幼名観世丸、伊賀の人、服部元成の三男という。卑俗な雑芸に過ぎなかつた古猿楽より今日の如き能楽を創成した最初の芸術家で至徳元年五月

古有姓氏、録後有大系図以明閥閥而士庶人譜牒殘缺不知其系豈非闕典乎今茲建田原公祠、于唐沢山山広募裔孫臣民贊助天慶以降経歳千有余年源遠而派別根深而葉繁索居餘処乎五畿八道間不詳其踪者不尠山土家左聘參考日記著田原族譜一卷岩崎方大出賃刊之其意（下略）

とあり「田原族譜」の再編纂に苦勞したことが記されており、この内容を確実に裏づける古文書としては旧著による「田原族譜」を参考としたものである。

観阿弥の脚色した戯曲

木曾名所図絵、武家評林、風土記前上野志によれば『鉢木』は謡曲から伝えられたものであると云い、増鏡、草枕、太平記、続本朝通鑑（何れも鎌倉時代の編纂）名跡志、等では時頼が出家し最明寺となつて諸国を巡つた事実を伝え「捨葉抄」では常世の實在を確信して『鉢木』が単なる物語りではない様な節もうかゞわれる。これ等の

十九日五十二才で駿河の演能先で没した。

この大芸能人の作とも、又この観阿弥の子、世阿弥の作とも「謡曲大観」では云つて居る。世阿弥は貞治二年（西暦一三六三年—一四四三年）に生れて居り、時頼が出家してから百余年後の世代の人々である。観阿弥もかなり多くの創作をして居るが、世阿弥には更に多くの作品が残されてより大きな芸術家だと折紙がついている。能楽が鎌倉時代の末期に至り先づ原型が出来、足利時代に完成したもので更に足利氏特に義満（西暦一三五八年）に保護され育成したこれ等の人々が、こんな美しい物語りをとらえない訳はなく、従つてこの脚色も必ずしも世俗にいう架空の人物を持つて来たものとはかり考えられないものがある。これだけの骨組をどこからヒントを得たか？問題で口碑によつてこの事を知つた作家が、とびついたとも推定出来るであらう。

足利文化の豪華の中に育ち、その上金閣寺を造営したあの義満の保護を受け、能楽を芸術として大成した世阿弥には「花伝書」をはじめ多くの能楽書が残されている程であるから『鉢木』もこの

頃の口碑によつて彼は実際に調査しその事実を知つて筆を起したであろうことは地名もくわしく書き込まれている点からも想像出来るものがある。

安養寺の焼払事件が正元三年(西暦一二五九年)であり、常世が鎌倉に召集されたという一二五五年から四年目である。この安養寺事件も相当多くの問題を残し、その真疑の程も判断に苦しむものがあるが、年代的には一応筋は通つてゐる。

以上の諸点から考察すると佐野源左衛門常世は實在した様にも思われ、この事実を観阿弥が謡曲に戯曲化したとも判断出来るのである。

文明十七年(西暦一四八五年)秋京都から上州に入り十八年の十一月五日、堯恵は藤原忠信をしるべとして佐野舟橋を訪れたことが、堯恵の北国紀行に次の様にかゝれている。

彼所を見るに西の方に一筋平なる岡あり、うへに白雲山竝に荒舟御社の山有、其北に浅間の嶽崖巍たり、舟橋は昔の東西の岸とおほしき間田面はるかに平々たり、兩岸に二所の長者ありしとなり、此あたりの老人出て、昔の跡を教ゆるに、水も無く細き江のかたち有て、二三尺計な

劇作家の脚色ともいふ

由来人情の美しさは劇作家のみがとりあげてゐるものではない。昭和十二年十月発行された「勝地群馬」に高崎が生んだ文学者で書家であつた大沢雅休は「上毛の景観美と共に人情美を」の中に「由来上毛人は清冽透明な人情の美しさによつて知られてゐる。新田、高山の偉大なる精神は東上州の地を如何に神聖のものたらしめたか知れないであらう。佐野源左衛門常世があつて、佐野の舟橋の古跡は一層輝かしく又なつかしさを催さしめる。

(中略)万葉集には此の純情の貫かれたものが沢山ある。万葉集東歌で上毛は他国に比して其の数で最も多い。上代東国文化の中心は確かに上毛にあつた。詩の国は人情の国である。」上毛の詩人国をこうたゞえてゐるが、こゝに最も注目すべきはこれも高崎市出身で歴史家として知られる田村栄太郎で、その著「郷土史研究の手引」昭和十三年白揚社出版によると、次の様に「鉢木」の事実を否定しているので、その全文をのせてみよう。「複雑なのは佐野源左衛門常世で、小説と紀行

る石をうち渡せり、かれたる原に見わたされてそこにと思へる所なし、

跡もなく昔をつなく舟橋はたゞことのはのさの、冬原

堯恵は法印堯孝の門であり、夙に和歌を学び、古今血脈抄、古今抄延等の著があつて、天下争乱の応仁以後も天下大に乱れて、この軍陣の間を完全に往来し「北国紀行」をものしたのは文雅の力というべく、堯恵はこの佐野の舟橋のほかは、伊香保、榛名、草津、白井など各地を訪つて歌を詠んでゐる。堯恵は舟橋を訪れた際「鉢木」の里が舟橋と同一であるところから、当然こゝも訪つたことであろうが「北国紀行」にはその事は何もかゝれていない。堯恵はこの年十二月中ばに武蔵の国に移つた。

江戸時代の国学者清水浜臣の記せる(文政二年)「上信日記」に五月五日、本庄を出て上野に入り佐野村に常世の故事を回想し、高崎、安中を過ぎて松井田に泊というのがあり、江戸時代にも相当問題になつてゐた。

文が母体になり、謡曲の上で實在化された如きそれで」

と前書きをして、楠正成と正行との訣別で有名な桜井駅なども、太平記作者の紙上新設駅であり、熊谷直実が親類との領分争で憤慨して僧になつたのを敦盛を殺したためと歪曲したのも太平記であると、太平記そのものに信を置いていない。その太平記の時頼廻国の記事に

「一人正しければ萬人それに随ふ事分明なり、然る間なほも遠国の守護国司、地頭、御家人、如何なる無道德猛悪の者ありてか、人の所領を押領し、人民百姓を悩すらん、自ら諸国を順へて、是を聞かずば叶ふまじとて、西明寺時頼禪門密に貌をやつして、六十余州を修行し給ふに或時摂津の難波の浦に行き到りぬ」

とあるのがそれで難波で貧乏な尼を救つたのが、源左衛門を主人公とした謡曲鉢木の木の種本の一つとなつてゐる、寺領を武家に押領されたのが室町時代の時代相であり、その憤慨が太平記の作者をして、この創作をなさしめたらしい。鎌倉時代には時頼のやうな民政家が居たから、民衆も幸福だ

つたが、今の世の室町幕府には時頼らしい人物がないといふのが太平記の作者のねらつた的であり時頼の廻国があらうがなからうが、大した問題ではないといふのが作者の腹だらうと思ふ、その記事は左の通りだ。

「既に日昏れければ、荒れた家の垣間まばらに軒傾きて、時雨も月もさこそ漏るらめと見えたるに立寄りて宿を借り給ひけるに、内より年老いたる尼公一人出で、宿を借し奉るべき事は安けれども漢監草ならでは敷く物もなく、磯菜より外はまいらすべき物も侍らねば、中々宿を借し奉りても、甲斐なしとわびけるを、さりとては日もはや暮れはてぬ、又問ふべき里も遠ければ、まげて一夜を明し侍らんと、兎角いひ侘びて止りぬ、——朝になりぬれば、主の尼公手づから飯匙取る音して、稚の葉折敷きたる上にかれい盛りて持ち出で来れり、かひ／＼しくは見えながら、かゝる態などに馴れたる人とも見えねば、不審くおぼえて、などや御内に召し仕はるゝ人に候はぬやらんと問ひ給へば、尼公泣々さ候へばこそ、我は親の譲りを得て此所の

是れ天下の権を柄者、茲に来れるの象なり、亦奇ならずや、其妻聞て怪しむ、其後時頼鎌倉に販り、彼者を召て天文博士となす、惜哉其姓名を失て伝はらず」

とある一泊させること、時頼が鎌倉へ呼出すことゝが、かならず附いて廻るのが廻国話である、鉢の木もそれであるが、その箇所は誰も知つてゐるから省略する。

謡曲鉢の木の種本は、この太平記ばかりではないこの謡曲の作られた時代は室町時代であるし、武家政治への御用といふ建前があつて、どうしても武家政治への御用でなければならぬが、尼さんでは、いざ鎌倉と瘦馬に乗り鎌倉へ駆けつけるわけにはゆかない、どうしても関東武士でなければ面白くない、さういふ建前からもう一つ取上げられた素材が、釈宗久の「都つつと」といふ紀行文である、その記事を左に掲げる、●印をつけたのが素材となつたものである。

「春になりしかば、上野の国へ越え侍りしに、思はざる一夜の宿を貸す人あり、弥生の初の程なりしに、軒端の梅のやう／＼散りすぎたる、

一分の領主で候ひしが、夫にも後れ、子にも別れて、便なき身となりはて候ひし後、惣領某と申す者、関東奉公の権威を以て重代相伝の所帯を押し取りて候へども、京鎌倉に参りて訴訟申すべき代官も候はねば、此二十余年貧窮孤独の身となりて麻の衣のあさましく——只推し量り給へと、委しく是を語りて涙にのみぞ咽びける——斗藪の聖、つら／＼と是を聞きて、余にはれに覚えて、笈の中より小硯取り出し、卓の上に立てたりける位牌の裏に一首の歌をぞ書かれける——禅門諸国斗藪畢りて、鎌倉に帰り給ふと均しく此位牌を召出し押領せし地頭が所帯を没取して、尼公が本領の上に副へてぞ、是を賜ひたりける」

これが一般に事実として信用され、その上にまた嘘話が好事家によつて作られる、長州藩士の書いた「郷土史話の嘘実見聞記」にもこの嘘話がある曰く

「北条時頼、民の辛苦を問んと、ひそかに諸国を廻る、日暮である所に宿す、夜に及て宿主庭に出て傾見て曰、天文異あり、吾屋に星降る

木の間に霞める月の影もみやびやかなる心地して所のさまも松の桂、竹編める垣しわたして、田舎びたるさかたに住みなしたるも由ありて見えしに、家主人出逢ひて心あるさまに旅の愁をとふらひつゝ、世を厭ひそめける志の程などこまかに聞きて、吾も常なき世のありさまを、思ひ知らぬにはあらねども、そむかれぬ身のほだしのみ多くて、かゝらひ侍る程に、あらましのみにて今日まで過し侍りつるに、今夜の物語になん捨てねける心の怠も、今更驚かれてなど言ひて、しばしは此処にとまりて道の疲をも息めよとかたひしかど、末に急ぐことありし程に、秋の頃かならず立帰るべき由、契りおきて出でぬ、其の秋八月ばかりに彼の行方も覚束なくて、わざと立寄りて訪ひ侍りしかば、其の人はなくなりて、今日七日の法事を行ふ由答へしに。」

とある、上州の何処たかわからないが、鉢の木の作者は古来から知られてゐる佐野郷と結びつけたのであらう、次が軒端の梅と松の桂と竹編める垣の松竹梅だが、これが作者のねらつた山であつて

鉢の木の文を左に引用して見る。

「シテ『夜の更くるについで次第に寒くなり候何をがな火に焚いてあて参らせ候べき。や。思ひ出したる事の候、鉢の木を持ちて候。これを切り火に焚いてあて申し候ふし(省略)』」
松と梅を鉢の木にしたが、さて竹の鉢植に困つた結果が桜の鉢植となつたらしい、然し作者が氣付かなかつたのは、鉢植の生木が焚けるかどうかといふ問題だ、その生木も雪の積つてゐる木であることだ、この問題だけで鉢の木は怪しい伝説となるのである。

この時頼の廻国はなしを近世的に書き直したのが水戸黄門漫遊記であつて、この黄門漫遊記も事實ではない。

以上の様に『鉢木』説を根本から否定している、また「上毛及上毛人」にのせた西川玉壺山人(長尾村横堀の出身)の「前代上毛戯作家五先輩の列伝」によると、江戸時代に於ける上毛が生んだ作家のうち高崎出身の逢萊山人や西馬(阪東太郎後世譚)一九の「蝮五郎吉仇討夜話上州絹」奇々羅金鶏なぞあげているが、謡曲の『鉢の木』を題材

(文化七年) 積る思ひ女鉢木(六)京山作、春亭画

(文政二年) 雪の貢身替り鉢木(六)馬琴作、春扇

画

(天保の初) 雨の鉢木(市川団十郎) 八代目海老

藏 新十八番

之は八代目がまだ海老蔵の名で木挽町河原崎座にて始めて勤め大当り、市川家新十八番の内に極まる(海老蔵は七代目の実子天保九年八代目団十郎を継ぐ、俳号三升)爰までくると上州作家の細腕には及び難き点もあらうが、時代物として上毛的題材の範囲外では無いから、其作品的關係上茲に附記して置く。次の追善狂歌集の出来たのも此狂言当りの為と見へる。

(天保八年) 狂歌春の晚鐘 佐野渡追善集 滝の

本千丈撰

此撰者滝の本千丈と言ふは即ち花輪堂世十返舎一九で青木年表に滝の糸丈とせしは誤りにや(天保十二) 恵の花雨の鉢木(四)笑顔作、国貞画(安政元年) 佐野渡雪乃八橋(三)春水作、同
同四年七篇まで出せり之は二世春水なり。又此の鉢木は一中節、河東節等の三絃文学中に尤も

とした戯作について次のように書いていて、古歌では舟橋が人氣を集めたが戯曲ではやつぱり『鉢木』が取りあげられたことを意味する。

其次の人氣的題材は何と云つても其地理を萬葉歌曲に取合せた謡曲『鉢の木』の主人公佐野源左衛門常世を口実として、之を利用し翻按の奇を弄するものである、併し之は作者達が至極軽い取扱ひにして銘々勝手な世話物に應用し變化自在の観を呈してゐる。即ち、

(安永三年) 天女能女、娜二代鉢木(五)清満画

(ク六年) 太平出世鉢木(三) 桂子作、清経画

(ク) 敵討女鉢木 龜遊作、自画

此書は「お竹大日利生記」とも云ひ、其開帳の時の際物まきもののよし、女鉢木は名ばかりの事なりと云、

(安永九年) 銀世界豊年鉢木(二)お連作、秋童画

(天明元年) 化物世継の鉢木(五)可笑作、清長画

(ク八年) 妙智力繁花鉢の木(二)伝楽山人作

(文化五年) 赤繩小説佐野の雪(五) 成三樓著雪

霜画

(文化六年) 敵討女鉢の木(三)市三作、春扇画

其名品秀逸多くあれども今は総て略之。

不幸にしてこれら常世に関する戯曲を見ることも出来ないし、一中節、河東節にも『鉢木』が唄いこまれてゐるらしいが、その歌の内容も知ること出来ないのは残念であるが、兎に角『鉢木』が江戸時代でも人氣があつたことだけはこの作品からも偲ばれるものがある。一中節や河東節にまでも唄われているのであるとすれば、土地の地唄などにも残つていそうなものであるが、調査ではそれらしいものはみつからない。しかし江戸文学の特長である川柳には『鉢木』はとりあげられて居りこの時代に発行された「柳多留」の中にも次の句が見える。

源左衛門いとおんみつに宿をかし

源左衛門鎧を着ると犬がほえ

源左衛門戸塚ケ原で二度ころび

また天明三年の「綱ざこ」という狂歌集を見ると

奇々羅金鶏(七日市藩)のものに

佐野源左權なく僧とめてない袖をふる雪の夕ぐれ

俳句や短歌にも織こまれてゐると思われるが今の

ところ調査不充分で、それを發見出来ない。

常世は実在したか

最明寺と上野の佐野のつながりを何の根拠で、舞台に選んだかたゞ「古来から知られてゐる佐野郷」と結びつけたのか、これら能作者が扱った劇中の人物を調べれば調べるほど謎は深くなり興味もつきない。

或る史家は時頼が巡国した事実がその時代の紀行等が載せられている「吾妻鏡」にないのに、常世との出逢いも当然あり得ないと力説し、また太平記すら信用されて居ないが、前述の様に古文書の中にある文献にある通り、最明寺の遊歴を頭から否定出来ないものであるが、戯曲説も、江戸時代にすら十三にも及ぶ作品がある位であるから、鎌倉以降の各時代にも戯作があつたものと考えられて、研究の余地は残されよう。

「七百年も昔薪がないとは考えられず盆樹が炉で燃えると思えない」と『鉢木』説を否定しているものもあるが、古武士の間にはこうした芝居がよりな行動は多く、珍客を優遇する方法としてその位のゼスチュアールは常に用いたもので、相手が残念な事であつたらう、しかし昭和十三年発行田村栄太郎の「郷土史研究の手引」のなかで系図につき次の様に述べているのも参考とならう。

名家の系図、寺社の縁起は、共に大部分が途中で製作されたものであるが、たゞ漠然と系図や縁起が作られるものでなく、種々の事情によつて作られたのである。その作られた当時の事情を掴むとき、其の人や時代の様相が理解されるその意味で重要視すべきものである。系図や縁起が多く作られたのは身分格式をやかましくいふやうになつた鎌倉時代や江戸時代である。

けれどもこの文献から考察して『鉢木』が単なる伝説による架空の物語りであると片づけられないものがあり、古文書にその事実を証明するものがないにしても既に「田原族譜」によつて常世の系譜が明らかになつている以上、架空の人物と断定することは出来ない「田原族譜」に信を置くとしても尙「田原族譜」がどんな記録によつて作製されたかは史家にとつては相当問題にならう。しかしこの記録が、後世でつちあげたものとばかり云えないことは、森保定が確認しているから常世

時頼と知らずともこの様な作法は武士の習性として余り不思議でもない。のみならず鎌倉時代の武家の在り方として充分に味があり、鶴阿弥なり世阿弥なぞがこの事を見逃すわけもなく、あゝした立派な芸術に脚色されたもので相当根拠をもつて取りあげたものと信じてよいと思う。殊にこの時代の脚色に必ずモデルがあつたことは「名作謡曲新釈」の中でも『鉢木』は四番目狂言であり四番目狂言は「現在物」で幽霊のかたちでないと言ふことにかけているのも味うべき言葉である。

『鉢木』については当時の文献や、その時代の古本を親しく見ることの出来ない現在では、口碑が重点になることも止むを得ない。そして問題をより深く掘り下げることも困難となつたのも事実である。常世の文献なり口碑が前述の様に幾様にも伝説が分れていて、何れを正しく確認するかは不可能であり、また系譜にしても、佐野城主とのつながりを確実に裏つける証拠も「田原族譜」や「唐沢山神社再建史」だけでは心細く、殊に年代が入つていない点や、口碑に伝わる年代と相当大きな喰いちがいが認められることなぞ史家にとつて

の実は裏書きが出来、残るは『鉢木』の事実を証明することを得るならば、大きな発見となるわけであるが、このことは今は口碑で信ずるより方法は無い。そこで考えられるのは常世が佐野に生れ、高崎の佐野に住み、その子孫が桜井庄を統治したのではあるまいかという事で、今はたゞぎめ手がないまゝにこの物語りは美しい物語りとしてそれなりに真をおいてたゞえてやりたいと思う。

尾崎紅葉の「金色夜叉」の熱海にあるお宮の松にしても、徳富蘆花の「不如帰」の伊香保のわらび狩りにしても、今では小説なりの名所というよりも、事実上の名所として不思議がらない世代である。こんな美しい物語りを地元高崎市が世に、より広く発表する方法を講じなかつたのも不熱心過ぎるし、今日まで何故もつと研究をしなかつたかも知不思議の一つである。

以上記録したもの、他に常世については栃木県佐野市の唐沢山神社を中心として葛生町等より多くの資料がある様にも考えられるし、黒部市三日市町にも、こゝに発表していない記録もあるうと思われるが、何れも今のところでは伝説以上には

出て居らず「田原族譜」による常世の系譜だけが手ぐりであり、唯一の裏づけでもある。そしてその年代記録でも発見出来ると共に、もつとくわしい文献が出て、今後の史家の研究に参考になればより幸である。

田島武夫が昭和三十二年四月、鬼城会の現地調査で常世の屋敷跡で次の様にのべている。

過日唐沢山神社宮司の佐野五郎氏が訪づれて源左衛門が佐野に生れ、高崎に住んだと云っていたが、問題は「鉢木」の事実の有無で、これがなくば歴史として価値はない。

尙「鉢木」の謡曲の説明の中で書き落したが、「うち乗りて上野や、佐野の船橋取り放れし、本領に安堵して……」という文句があるが、これは万葉集卷十四の歌「かみつけぬ佐野の船橋とりはなし親はさくれどわはさかるがへ」を佐野の縁で引き「とり離れし」の序としたものである。

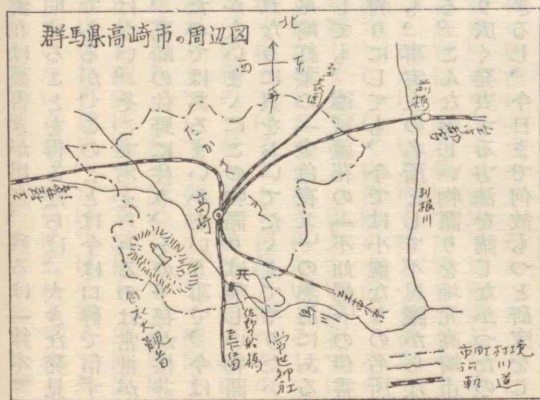
常世の住宅跡から北方約二百米ばかりの道路端に、船木の観音と称するものがあり、石板碑にこの古歌が刻まれて今に残されているもので、この古歌については前に田島武夫の「高崎市の名勝旧

称し、当時は往来極めて多く繁昌したと他の記録にも残っている。

こゝの高台から烏川をはさんで（碓氷川と烏川とが合流した下流）多野郡八幡村（現高崎市）根小屋山名方面の丘陵や、上野三碑で有名な山上の碑（天武天皇九年西暦六八一年建立）や金井沢碑（神龜三年西暦七二六年建立）なぞのある山名の小丘が眺められ（その頃は佐野村であった）西には浅間の秀嶺や、赤城、榛名の山々も遠くのぞまれるという風光に恵まれた地点だけに、歴史に残るこれ等の事柄がこゝを焦点としたのも面白く、これより東に一キロ余り群馬郡倉賀野町には浅間山古墳（仁徳年間西暦三六五年頃建設）や大鶴巻、小鶴巻なぞの古墳群もあつて、この附近一帯は重要な土地とも考えられ、史家の常に注目しているところであり、常世がこんな美しい土地を安住の地を選んだこともうなづけるものである。また山上碑を建立した長利僧にゆかりのある放光寺は、この定家神社の東へ五十米ばかりのところにあつた。対岸の山名方面が昔佐野の区域であつたことは神龜三年二月二十九日（七二六年）に建

跡」及「舟橋」の欄の中で紹介してある平安時代の恋物語りゆかりの古歌である。

船木の観音と（西光寺）定家神社、佐野の渡は丁度三角形の各頂点の地点にあり、その中心に常世の住家跡があつて、こゝの道路は昔鎌倉街道と



上佐野町の周辺図

立された金井沢碑に上野国群馬郡下糞郷高田里云々と記されていることや、また天武天皇九年「六八一年」に建立された山上の碑にも「佐野三家云々」とあつて、山名や根古屋は佐野郷であつたことも推定出来るものがある。昔片岡郡に佐没郷があり「名跡考」では佐没郷は石原であると云っている地理志料では佐野附近を佐没郷とよんだと云っている。

治承元年（一一七七年）には、こゝの対岸である寺尾に新田義重が寺尾館を建て、新田一族を指揮し、また義重の長子義俊が碓氷郡の里見に、次子義範がこの山名に城を築いて居り、武田信玄が築いたという根小屋城もこゝにあり「鉢木」の山本の郷はこの辺とも云われている。このあたり烏川を挟んで重要な地点であり、従つて鎌倉街道にある佐野部落に当時焦点が置かれていたのではあるまいか。鎌倉街道は昭和三十一年発行河田書房の「日本歴史辞典」によると、

鎌倉街道はおもなものは三つあり、上の道、中の道、下の道で、何れも武蔵国に向い関東諸豪族の屋館へ通じていた。上の道は化粧渡―上町

屋―渡内―府中に至り府中より恋が窪、野口―堀兼―菅谷を経て、上野、下野、信濃に通じた。一一九三年（建久四年）源頼朝の入間野、那須野の狩や、一三三三年（元弘三年）新田義貞の鎌倉攻の通路などに利用された。（後略）

また「上毛国風土記」によると鎌倉街道というのは板鼻―烏川―和田―佐野―山名―藤岡―八幡山―八王子―鎌倉

とあり、こゝでいう烏川という地名はなく豊岡辺を指したもので、和田は高崎駅であり、八幡山は児玉の八幡山である。八王子から菅谷を経て「日本歴史辞典」にある地名の逆にのぼって行くのである。

鎌倉街道の文化

この鎌倉街道文化については、萩原進著の「上州―風土と人」の中で、

今一つ鎌倉街道というのが、碓氷郡から烏川の右岸を通つて多野郡山名に出、武蔵の府中に達する道があつた（中略）上野国の文化はこれら

「平盛衰記」では荒蒔の里「平家物語」では松枝村とある。浅間山の裾野の狩りに来た源頼朝が松井田に泊つたという「曾我物語」と共に鎌倉文化と鎌倉街道はおもしろい関係にある。

この一文は当時の鎌倉街道の文化を語るものとして、常世の佐野の住居にも当然関係をもつことになり、非常に参考となる。この時代は京都から木曾谷を通り、碓氷峠を越え板鼻、高崎から分岐するまで一本であつた。この古道も現在の道では勿論なく、坂本より峠は右の山中を登り碓氷峠の頂上につき軽井沢に下つた。この道の時頼が信濃から上州へ下つて来たものである。

文久元年十一月（一八六一年）孝明天皇の時皇女和宮が徳川氏に嫁ぐため京都からこの碓氷峠を通つた中山道を通過は一行三万人で、当時上州の村々は労役でてんやわんやの騒ぎで、道路も巾を二間二尺にそろえ一尺下まで石を敷きつめ、上を覆い小砂利と盛砂をし排水溝も作つたというから特に驚異的な御輿入れであつた。沓掛を出たのが十一月八日、坂本に十一月九日泊り、翌十日松井田（御昼食）安中（御休）を経て板鼻へ御到着本

の道を通つて流れこんでいる（中略）新田平野を進んだ鎌倉文化が、新田氏という土豪を育てたのも故あることである。一方鎌倉街道を進んだ文化は、碓氷郡の谷に多くの痕跡をとめてゐる。柳田国男氏が松井田は中世物語文学の唯一のたまり場であるということを語つたというのも、何か碓氷郡には鎌倉時代文化の匂いがしみこんでいることがわかる「吾妻鏡」という当時の記録からも碓氷路は何となく鎌倉の匂いがする「曾我物語」に出てくる松枝「義経記」に出てくる義経のロマンチックな背景になる碓氷路は何といつても劇的である。頼朝に追われた義経が、板鼻に着いたが宿るべき家もないのとある家にゆき一夜の宿を乞ひ願つた所、主人が留守だといつて許さない。しいて頼んで無理に宿つた所それは盗人をして世を渡る伊勢三郎のすみ家であつたと「義経記」は記している。また「平治物語」では伊勢三郎義盛とは松井田で会つたことになつてゐる。義経はこの義盛と主従の約束をなし物語文学としてもてはやされ興味津々たる義経記のテーマを彩つてゐる「源

陣水島喜兵衛方（現町役場）へ御とまり遊ばされ十一日板鼻を御発、高崎（御休）倉賀野（御昼食）を経て、十六日に江戸に入つたという。こんな秘話も残る街道でもある。

鎌倉時代高崎はまだ高崎とよばず、和田氏の時代で赤坂荘とも、和田宿ともよんでいた。鎌倉の和田合戦に破れた義国の亡命した白川の郷和田山につながら義国が赤坂に移り住んだのが寛元二年（一二四四年）で和田義信の子、正信が孫信高に至つて和田宿と改称したというのが、それから三四十年後であつたから、鉢の木の話し之宝治、建長年間とは僅かに二、三年を前にした話である。この時代は赤坂の荘として知られていたもので、改称当時の宿も百戸か二百戸以内ではあるまいかと思われて淋しい宿であつたが、当時としては、これだけ集落している街はやつぱり少なかつた。まだ赤坂の荘と云つた頃寧ろ山の開山で興禅寺が建立され、乾元二癸卯歳（一二三〇三年）には新田氏光寄進の大鐘が出来、和田宿と改めてから赤坂明神の榎森に（現赤坂町）熊野神社（現高崎神社）五霊神社（現貝沢町に移転）二の宮神社（城内にあり今は

ない)を相州三浦より勧請して建つて居り鎌倉街道における立派な宿を形成していたとも想像される。和田義信が赤坂の故趾に和田城を築いたのはずつとのちの正長元年(一四二八年)であり、記録に残っている和田宿の戸数は、それから約三百年後の永祿年間(一五五八年)のもので七二四戸となつて居る。鎌倉町というのが、その頃からあつたかどうかは不明で、明治六年の改正で鎌倉町と号したことは記録にある(鎌倉町は現に若松町と変つた)が「上毛及上毛人」高崎誌資料によると、「古時赤坂村の田甫上鎌倉甫往還の属地、慶長三年町割の節、屠兎等の住居故に植竹と云、明治六四年更に町次となりて鎌倉町と号す。蓋往昔は鎌倉往還の遺跡なるを以て也」

和田宿が当時鎌倉街道文化の中心となつていたことは萩原進の説でもうなづけるものがあり、碓氷峠を堺としてこの附近はもつと深く掘りさげてゆくと興味があるが、こゝでは余りその必要もなさそうであるが、源頼朝が三原莊(吾妻郡婦恋村附近)に巻狩りしての帰りに新田館(新田館は寺尾のこと)に寄つたのが建久四年(一二九三年)

上毛野佐野田の苗の群苗に事は定めつ今は如何にせも

上毛野、佐野の舟橋取り放し親は放くれど

吾は放るがへ

万葉集に残つた佐野のあたりは文化人にも注目されたことはこの諸歌でも察せられる。家隆と定家が歌の橋で詠んだのがどんな歌であるか、文献にないので知る由もないが、兩名が、佐野の舟橋を詠んだのは相当に多い上に、舟橋の悲恋を詠みに来た歌人がかなり多い点から見ても鎌倉時代の和田宿の文化はそう捨てたものでもなく、従つて入道時頼と常世との古事も『鉢木』に戯曲化されてはいるが、和田文化と対照して研究して見るのも面白いと思う。

上州は長い間「上州の馬盗人」とか「上州の盗人」という言葉が通つていた。上州人を見ると「あれは上州の馬盗人だ」と云われたもので、この言葉が鎌倉時代から始まつて武家時代(江戸時代)最も華やかに騒伝されたところから、この鎌倉街道文化による旅人を途中でおどして金品を奪つた徒が相当居たことを意味して居り、盗人をとせい

であり、例の「歌の橋」として名の残る藤原定家が、新古今集を著して間もなく(一二〇五年)この佐野に居住して歿したとも伝えられるのも仁治二年(一二四一年)といわれこの頃であり、定家の様な文化人や定家と歌合戦をした藤原家隆(一一五八―一二三七年)のような歌人も乗附(当時片岡郡石原、現高崎市乗附町)に住んでいたといわれ、また新古今集や、この時代に編纂された「水鏡」「増鏡」「吾妻鏡」にも従つて関係があつた訳である。

天平文化の産物である万葉集にも沢山の東歌がのせられて居るなかに、碓氷峠や佐野を詠んだものがかなり多いことも注目される。

ひなぐもり碓氷の坂を越ゆる日は、せなのが袖もさやにふらしつ

ひな曇り碓氷の坂を越したに妹か恋しく忘れぬかも(他田部の子馨前が詠む)

上毛野佐野のくちちち折り栄し吾は待たむ多今年こずとも

多胡の嶺に寄網延へて寄りすれども豈来やしづしそのかはよきに

としていた伊勢三郎義盛が板鼻にすみ、また義経の金主であつた金売吉次が旅宿を襲つた賊が上野住人豊岡源八であつた。この源八は碓氷郡豊岡村(現高崎市)の人であつたのもよい例である。こんな追い落しをする不人情の世の中で、源左衛門の様な美しい物語りが生れたことも注意すべきものがあり、また本当に嬉しい「エニース」に相違ない。

『上州の馬盗人』の言葉は街道悪が中心となつたもので、その最も盛んになつたのは勿論江戸時代であるが、鎌倉街道や中山道として三国街道を中心とし、その頃から最も人気のあつた伊香保温泉草津温泉へ旅行する人々、特に女性などの道弱をつれたものを脅した「上州の馬盗人」は案外高崎宿や碓氷峠が中心となつて起つたのではあるまいか。例の浮世絵の大家広重の「木曾海道六拾九次之内高崎」といふ錦絵に、女づれの旅人に人足が銭を乞うているのがあり、これが豊岡辺の図とも思われるが、この様に画人にさえ注目された上州にとつて、この『鉢木』の内容は汚名をそゝぐ心うれしい美談であり、上州人を見なほす材料ともなる貴重なるものである。

加賀における文献

「鉢木」の中にある加賀の梅田、越中の桜井、上野の松枝の三邑のうち加賀の梅田について少しふれて見る「桜井庄と佐野源左衛門常世について」から「小松から北海道へ移られた淨福寺住職からきいた直話」というのが載せてある。これは当地の中田久五が述べたものだという。

梅田は小松在と思ふ、そこに常世領の三万石の地所あり、前田藩では飛地で邪魔になるので三万石と換地を迫り書状で達示して来た。主人は仕方なくきいたが、奥方は祖先に申訳ないとして反対し遂に堀に身を投じて自殺し、蛇となつて表れた。奉行は更に強行の為に来たが、蛇にあつて逃げた。佐野主人は馬で小松まで逃げたが、馬大に疲れ、危い所を折よく百姓の老婆が道に水をまいていたのが、馬の口にはいり、馬も元氣づいて小松を逃げおせた。この時のお札に佐野氏老婆を呼び出した。老婆何事ならんとおそれ戦っていたが、曾てのお札の印に何なりと欲しいものを申出られたいと云つた。老婆

は再び驚いて、あれくらいのこと、それでは拙宅から道路に沿つて並木が続いている。秋この木に稲をかける(ハサ)ことをゆるされたいと願つたので、それくらいのことではないと申された。

加賀の森本町教育委員会から問題の梅田の邑について次の様に調査の報告を受けた。

現在の梅田部落は戸数一八戸、人口一一〇人で現在梅田部落に残る伝説等にて『鉢木』に關すると思われるものはない。梅田が古来より水田が開け、しかも良質米の産地として名のあつたことが、隣村内灘村小浜神社に藤原政隆を奉仕せしめたこと(弘安五年)とあわせ、梅田の名を鎌倉にまで聞こえさせ、又時頼が、常世に授けし梅田の里はこの当町の梅田なり、と言ひ得ようが、北陸道は梅田の西方七〇〇米に南北して居るが(藩政時代も同様)鉢木當時は八幡梅田、岩出を結ぶ山添いにあつたものと思考される。

梅田の地形その他について述べ、更に「続本朝通鑑第百二」「三州誌」なぞからその伝説をひいて

次の様にのべている「三州誌」等は前に記してあるので省略する。大正九年刊の「河北郡誌」森本村の部に
或は曰く謡曲鉢木に、最明寺時頼が佐野源左衛門に与えたる三箇の莊中、加賀の梅田なるものは実に本村の梅田なりと。然りと雖も鉢木の構想は固より架空に出づ、偶々同名の地あるを以つて之に附会せんとす。好事も亦極まれりというべし。

とて架空説に強く、また「久教野道中記」をのせて右の山際の洞口に梅田見ゆる、鉢木の木の謡に、越中に桜井、加賀に梅田といふは、此所のことや。

と古事をのせているが、教育委員会の説では、梅田の里は森本断層崖下にあり東方なる溪間に一つの洞穴がある。其深さ知る由なきも、洞穴中水をたゞえていてこの水能登の岬に通じ海に注ぐと云われている。能登海岸に之に類似の洞窟の存しているのは符節を合せる感がする。昔時海岸の遺跡でもなかるるか、又椀貸穴の伝説も存しているがこうした伝説は本郡のみでも、六、七ヶ所に及ん

でいる。梅田の蛇原には旧藩時代の大森林地で天狗の棲息所と呼ばれその頃弁慶なるもの八田に住し、毎夜武芸の鍛練を成し、近郷の師となつたと云われている。当村は葦製造を以て古来より名高い。謡曲鉢木に因める名所であるが藩主の領米供給地であるだけ、良米産地と見えて、此米を用ゆる時は酒業の釜なりを止むる事が出来るかと伝えている。その沿革につき次の様にも述べている。

当部落は山麓に建ち、往時にあつては湖沼深く侵入していたにも拘らず、梅田の里地内は早くより發達し、良田を有して居たものと見え、交通灌漑よろしく、旧藩時代にありても藩主前田家への飯米を給与した事等によつても其一端がうかがわれる。弘安五年(一一八二)内灘村小浜神社に藤原政隆奉仕した、これは此前年幕府勢に乗じ時宗は英断によつて元冠を攘ひ、国威を宣揚せしとは云へ復讐を怖れ社寺に祈禱、供施する為であつた(昭和七年七月十八日發行「加賀河北の史的文化と地的景觀」池上鋼他郎著より)

「加賀志徴」卷十二による梅田村については

浅香三井の三日月日記云。今町の右の山際の洞の口に梅田村見ゆ。是なん鉢の木の謠に、越中に桜井、加賀に梅田と諷ふも此所の事にや、繞本朝通鑑卷百二に(省略)謡曲の詞には、上野国佐野渡りとありて、さて加賀に梅田、越中に桜井、上野に松枝、合せて三ヶ庄を賜ふとす。「名蹟誌」に、隣邑、観法寺の観音堂に地藏の像あり、之はもと佐野源左衛門が守本尊にて、此梅田村に安置せしを後に此所へ移したるよし伝言せり、一説に江沼郡梶井村の古名を梅田と云。故に此邑より大聖寺へ仕官する者皆梅田氏と称す、されば彼古事なる梅田も何れの地ならんといへり。

以上が梅田邑に於ける文献である。また松枝というのは前にも述べた上州松井田のことで、今は碓氷郡松井田町と称しているが、これに関して何の文献もない。松井田町は高崎から僅か五里にたりない所にあり、信越線国鉄の駅がある。碓氷川がその脇を流れ、碓氷峠の東の起点でもあるが、昔はこれから西にある坂本宿が問題となつて居り、松枝はさほど繁昌はして居なかつた。この街道筋

では高崎より近い板鼻宿が有名であつた。江戸時代には板鼻宿には遊女屋もあり繁昌し、明治に入つて廃娼が県会で決定した頃も七十二人の遊女が居た程である。高崎と松井田との中間にあり、多くの物語りをもつ古い街で、今は安中町に合併している。

姫路市と岐阜にも子孫

常世の遺跡が以上の様に各地にあることは前述の通りであるが、更に播州姫路市にも常世の子孫が存在して居ることが、大正十三年七月発行の「上毛及上毛人」の中に次の様に記載されている。

(前略)常世の子孫といふのは浜本久三郎と云ふ人で、其の人が去る大正六年中父久次郎の三十三回忌の法要を行ふについて仏壇を掃除した処其の仏壇中に秘められた篋中から佐野源左衛門常世夫婦の仔細を書いたものがあり、同市内野里の慶雲禅寺境内の草深い中に源左衛門の墓がありその文面には

妙外一有居士、建長七年乙卯三月十五日

佐野源左衛門常世

晦芳妙国大姉

文永三申年八月十二日小寺民

部左衛門娘

と記してあるので、同人が即ち其の末裔であると主張して居るのださうであつて、五月十五日同市大田山最明寺に於て常世の追弔法会が行はれたとの事であるが、其最明寺には時頼の守り本尊が安置されてあつた。所が北条九代記に時頼が二階堂入道を伴ひ諸国行脚に出かけたといふ年には既に源左衛門は亡き人の数に入つて居るとの事で尙ほ大に研究の要があるうか

姫路市に墓碑があつたことは全く初耳であり、岐阜のものを加えると四ヶ所に常世の墓地があり、遺跡は五ヶ所ということになつた。姫路市のもものは岐阜のと共によりくわしく調査する間のなかつたのは遺憾であつた。

岐阜のものは、佐野村の小林儀緑村長が当時調査したものが残つていたが、高崎市と合併後の火災で焼失してしまつたが、何れにしてもこの二ヶ所の遺跡は問題とはなるまい。

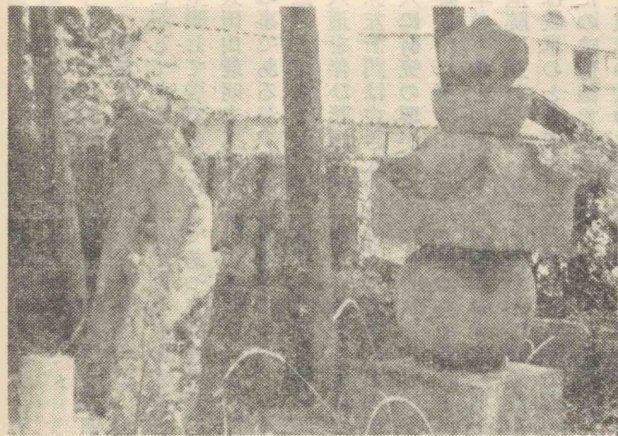
姫路市教育委員会の浜本家調査の報告は次の通りであり「史実の点については何とも申し上げられない」とつけ加えている。

佐野源左衛門常世が北条時頼の命を受けて最明寺(当市野里大日)の普請奉行として参りました。其間に於て小寺民部の娘を嫁として家を持つたようです。其の子孫が浜本家え養子として迎えられたのが久次郎で、久次郎の祖父のようです。其の後佐野家が衰え佐野家代々が信仰している観音様と佐野家の過去帳が浜本家に譲渡されて、今では祖先代々のお祭をこの浜本家が行つて居るようです。だから浜本家は佐野家の子孫であるといえると思われまふ。尙過去帳や観音様は大東亜戦争の際空襲により戦災を受けて今ではわからぬようです。

佐野源左衛門の墓というのが最明寺のすぐ南、大蔵神社の境外にあります。自然石の石碑がいくつもありますが、その内の一つがそれで、他の五輪の塔の碑には寛永三年丙寅とありますので後に作られたものではないかと思ひます。

自然石の碑には「妙外一有菴主、梅苑妙玉大姉

「霊」とあります。裏には何もなく、一、二度火災に逢つて碑は大変いたんでおります。(写真左の棒形のもがそれ)



墓地の常世の路

鉢木の研究家

高崎市には常世についての研究家は極めて多く本多夏彦、田島武夫、加藤安雄、清水糸藏、島田二郎等をあげると共に、地理的に最も関係の深い小林儀緑を忘るゝことは出来ない。前述の常世の住居跡から常世愛用と伝える茶釜を掘り出した小林常八は儀緑の先代で共に佐野村々長であった。茶釜や天がん銭、を保管しているばかりでなく、村長時代特に常世事跡につき研究もしこれを昂揚につとめ、昭和二十二年には同じ所から九千二百六十六枚という支那渡来の古銭を掘り出している開元通宝(唐武宗時代西暦七一三年)乾元重(唐祇宗時代西暦八一三年)周元通宝(後周世祖時代西暦九五四年)等が最も古く、最も新らしいのは永樂銭(明成永五年西暦一四二二年)である。開元通宝は奈良時代、乾元重及周元通宝は平安時代であり、これ等の古銭が、豊臣秀吉の慶長錢鑄造の頃まで和漢相並び日本では通用していたものでこの古銭と常世との関係を結ぶ線が出て来れば大きな収穫となろうが、県下各地で発掘せられた古

銭の殆どが上記支那銭を中心としていることも考うべきことである。この様な多種の古銭発掘は將來への希望が持たれ、且つ極めて貴重なものであるろう。

小林家は代々源左衛門研究には極めて積極的であり、常世神社建設にも多大の力を入れて居り、小林儀緑村長は村会の決議で「鉢木」昂揚につとめ当時の研究家細野平格を伴つて岐阜県下にも視察に行つて源左衛門遺跡を調査している。これは同地に源左衛門が居て墓地もありその子孫が十八代にも族譜が残つて居り、時頼の西光寺住職からの書翰もその寺が処有して、源左衛門遺跡がまた一つ増えたことを発見している。

古いところでは「高崎市史」を編纂した山内留弥「群馬郡誌」の丹下鎮象、高崎に明治の晩年から大正年代まで住んでいた歴史家の豊田学堂も忘るゝことは出来ない。

高崎市赤坂町の七雷久老舗主石川久貞もまたその一人で「鉢木」という名菓を製造している。即ち高崎名物となつて居る鉢の木せんべい、羊かん、最近なぞがそれで、最近では「三箇の荘」なる菓

子を売出している。三箇の荘とは桜井、梅田、松枝に因んだもので、何れも商標登録され、謡曲の「鉢木」の中にある「駒とめて、袖うちはらうかけもなし佐野のわたりの雪の夕暮」という古歌が印刷されて装ても美しいこの古歌は新古今集藤原定家(西暦一一六二—一二四一)の詠んだもので、謡曲「鉢木」に織り込まれてはいるが、詠んだところは上野の佐野でなくして大和路であるこれを佐野のわたりといふ句から持つて来たもので定家が上野でよんだ歌として残されているのは「恋わたる佐野の舟橋伸たえてひとやりならぬねをのみぞなく」で例の舟橋の悲恋をよんだものである。この定家については常世の蟄居した家から僅か二百米位南方に、これを祀つた定家神社といふのがあり、定家に因りある歌の橋の伝説も、この常世の住居から西に約一キロばかり離れた鳥川(碓氷川と鳥川の合流)よりの歌川町に残されている。また佐野の渡と称された所には最近までは木橋があつたが、先年の水害のため破損し昭和三十一年にこれを撤去してしまつた。その隣りを高崎から甘楽郡下仁田町に通ずる上信電車が走つ

て鉄橋となつてゐる。

尙七富久の『鉢の木』は元群馬県知事(大正一三年夏)大正十五年末)で、東京市長となつた牛塚虎太郎に愛され、宮中にも入り、貞明皇后や、天皇御一家にも買上の光榮に浴し戦争中は宮内省通いの宮中御用の通い箱まであつて護衛されながら道申したことは有名な話で、戦後マッカーサーにも愛された。

昭和二年高崎大観刊行会が出版した白石水著の「高崎大観」の高崎名物の中に「常世おこし、鉢木おこし、佐野源左衛門の事蹟に因んだ落雁種のおこし、常世は源左衛門の名である」というのがある。これは高崎市新町のみやげ屋鉢の木本舗の御主人大谷金之助老が常世の美しい人情に大きな憧憬をもつて、大正九年三月から製作販売したもので、当時高崎には高崎にちなんだ名物とてない時なので、この鉢の木落雁は頗る人気をよんだものである。この落雁は普通の粉では風味がないので特別な方法で製作されたもので、各展覧会博覧会に出品し、受賞しているのみならず、厚生大臣賞まで得ている程である。大谷老は今年九十才

関係はない。常世の人となりに大きな信仰をもつた人々であることには相違なく、この他にも鉢木を名乗る商品もあらうと思われ。

尙細野平格のことに少しふれたが、平格は高崎市龍見町の人で「五万石騒動」に関する著書もある歴史家であり、かつ政治に熱心で当時憲政会の闘士として知られて居り、かつて昭和の初年頃、栃木県佐野にゆき「源左衛門は佐野の人でなく上野の佐野が本家だ」と抗議を申し込んだというエピソードが残されている。その頃栃木県で『鉢木』は栃木が本家だと新聞などで宣伝したのを憤慨したのである。

以上で各方面の伝説口碑文献をあさりつくしたと思うが、その伝えるところ、様ざまであり、何

の高齢であり、大正二年会議所議員となつて三期

大正十二年六月には市会議員にも当選している。各都市にそれ／＼土地を代表する名物があるが、高崎にそれがない。商業者代表としても高崎を表象する名産がないということは淋しいとあつて、前記の様に鉢の木に因んだ落雁が考案されたもので、ゆわば高崎名物を作つた先覚者でもあるが、更に鉢の木の烏川に關係のある「聖石」も製作されてゐる。若松町地先の烏川中央にある名所聖石にゆかりをもたせたもので、専売特許も得て、何れも商標登録され名菓としての人気を得ているのは注目すべきことであらう。

この他に高崎市成田町には「鉢木」という小料理店があり、東京の阿佐ヶ谷駅前と蒲田駅前にも「鉢の木」という菓子店がある。また大阪市帝塚山にある将棋の名人戦が行われる旅館に「鉢木」というのもあり、栃木県葛生町にも鉢の木に因んで「山本の里」という菓子が売り出されている。山本の里は謡曲の中にある地名で、昔葛生を山本の里と称したという伝説からこの名を冠したものであるが、しかし何れも常世とは系譜的には全く

れに信を置くかは、史家がより正しい資料を得て判断することであらう。

私達はこの美しい物語りが、この世のあらん限り幾千年もまたこのまゝ伝つて行くであらうことを思うと、先人の残した文献をこうして一と所にとりまとめて、後世に残すのも極めて意義があり貴重だと考え、文献はなるべく原文のまゝを記載する様にとめたが、調査がまだ充分でなかつたことを認めるものである。殊に聞き込みが出版間ぎわだつたので、岐阜県下の源左衛門文献は全く手が出なかつたことは遺憾であつた。

尙天満屋で此度名所にちなみ、船橋の菓子のお土産品を、発売することになつたことをつけ添えておく。

年 代 表

西 歴	年 代	主 要 事 柄
七一三	和 銅 七	常世住宅跡から発掘された支那渡来の古銭の鑄造年代
一四一二	応永一九	開元通宝鑄造以下永樂錢まで五十種九、二六六個(小林家調)
一二三五	貞永文曆 年 間	藤原定家下佐野に流される(高崎市史)

一二三七	嘉禎三	常世の父小太郎源左衛門尉上野佐野城主となる(高崎市史)
一二四一	仁治二	下野国安蘇郡佐野春日岡に常世生る。父は上野守常春(葛生教委調査 葛生町勢發達史)
一二四四	寛喜二	和田義国赤坂(現高崎)に移り宿を構成させる(群馬県史)
一二四七	宝治建長 年	佐藤々太経俊は常世の伯父にして所領を横領する(高崎市史)
〃	宝治一	佐野源左衛門尉実綱法華堂に自戻す(葛生町勢發達史)
一二四九	建長年間	常世成綱と謀り願成寺に十二坊を定む(葛生町勢發達史)
一二五四	建長六	常世鎌倉に召される(高崎市史)
〃	〃	源左衛門歿する。墓地と位牌が葛生町桜井町願成寺にあり (葛生教委調、葛生町勢發達史)
一二五六	康元一	北条時頼入道して最明寺と称し諸国行脚し政治を調べる(大鏡、増鏡 草まくら、資料日本史、人国記、太平記)
〃	〃	時頼佐野に到り常世に逢う(混目抄、名跡志、三州志、木曾名所図繪 和漢三才図繪、武家評林、風土記前上野志、張長記、史鑑、越中志徴)
一二六〇	正元二	最明寺越中安養寺にとゞまる(越中史料)
一二六一	正元三	常世時頼の命で安養寺を焼払う(肯構泉録)
一二六三	弘長三	最明寺道崇(時頼)行脚僧となり諸国巡回(続本朝通鑑)
〃	〃	時頼この年十一月歿する。年三十七才(東鑑、日本史)
一二八六	弘安九	常世の祖父実綱歿する(田原族譜)
一二三三	元享三	常世馬入川で水死する。八十二才(高崎市史、葛生町勢發達史)
一三四三	元弘三	觀阿弥生れ「鉢木」を脚色する(謡曲大観)
一三六三	貞治二	觀阿弥の子世阿弥生る「鉢木」を戯作したとも伝う(謡曲大観)

其他主なる記録

- 一、鉢木のこと木會名所図繪、和漢三才図繪、史鑑、武家評林風土記前上野史等に記載されている。
- 一、「名跡志」に源左衛門が群馬郡佐野を領するとある。(大人名辞典)
- 一、妹婿並兄正信と謀り常世を殺さんとして妹を誤つて殺す。(大人名辞典、名跡志)
- 一、源左衛門は上州佐野の住人俵藤田秀郷の末孫三良政常が子なり。(捨葉抄)
- 一、源左衛門は下野の人なり(帝国人名辞典、群馬郡誌)
- 一、「続本朝通鑑」に源左衛門の志を感じ三莊を与えるところも無稽の談なり。(三州志)
- 一、鉢木に登場する人物は仮空の人物である。(謡曲大観)
- 一、鉢木は觀阿弥が作ったものである。(能楽大辞典)
- 一、常世に与えた越中の桜井とあるは今の三日市

辺である。(増鏡、史鑑、西徳寺縁起、桜井庄と常世について)

- 一、富山県下新川郡三日市に源左衛門常世の墓地並に遺蹟がある。(下新川郡史稿)
- 一、子孫が三日市に居住しその下臣もいたし、第二十七世の子孫が現存している。(下新川郡史稿)
- 一、佐野源左衛門之尉常世入道は幼名松千代丸と云つた。(盆樹舎歴代過去録)
- 一、常世の館跡が葛生町常盤地区豊代大内にある(葛生教委調、葛生町勢發達史)
- 一、鉢木の事実はすべて栃木県佐野である。(下野の昔噺)
- 一、常世は継母まきの憎しみを受けて十六才にして家出した。(群馬郡誌、葛生教委調、葛生町勢發達史)
- 一、鉢木の出来ことは正雲寺のことである。(葛生町勢發達史)
- 一、実綱―景綱―秀綱―常春―常世の系譜で実綱の次子景綱から田原家より分家した。(田原族譜、唐沢山神社創建誌)

一、十代国綱、佐野城主となり安房守と称し十二代常春始めて上野佐野城主となる。常春の子が常世なり。(高崎市史)

一、田原藤太秀郷の六代の子が佐野源左衛門常世である。(桜井清太郎系譜)

一、佐野市唐沢山宮司佐野五郎は田原藤太秀郷の後胤である。(唐沢山神社創建誌)

一、上野佐野の源左衛門住居跡から源左衛門愛用の茶釜、永楽銭、てんがん銭等が発掘された(群馬郡誌)

一、昭和二十二年更に同地から開元通宝を始め五十種の古銭が発掘された。(小林家)

一、最明寺入道が常世の家を訪れたのは十一月十三日である。以来地元佐野ではこの日粟の飯をたいて祝う。(群馬郡誌、上州路伝説篇)

一、常世から二十一代まで越中の佐野村に居住し代々源左衛門と名乗った。(桜井清太郎系譜)

一、鎌倉時代に於ける高崎―碓氷峠に鎌倉街道がつながり文化が開けた。(吾妻鏡、上州風土と人、上毛国風土記)

一、大正十五年常世の住宅跡に鉢木会が常世神社

を建立した。(現地調査)

一、常世の屋敷跡に古くから石宮があり、源左衛門八幡と称している。(高崎市史、群馬郡誌)

一、山本の郷は多野郡根小屋のあたりである。(上野国志)

一、山本の郷は葛生町にある。(葛生教委調、葛生町勢発達史)

一、『鉢木』は四番目狂言で「現在物」である。(名作謡曲新釈)

一、佐野源左衛門常世といふ人も寓言なるを知る人なし。(南畝叢書)

一、『鉢木』は小説と紀行文が母体で謡曲の上の実在化である。(郷土史研究の手引)

一、高崎の佐野は鎌倉街道にあり、鎌倉文化に影響あり。(高崎市史、群馬県史、かみつけより群馬、上州―風と人)

一、小林儀緑の調査により岐阜県下にも源左衛門の墓地があり、子孫十八代の系譜もある。西光寺住職から貰った当時の書翰も保存しているという。(小林家調査)

一、姫路市内野里の慶雲禅寺境内に源左衛門の墓

があり、その子孫が同市に住み、末裔に浜本久三郎がある。(姫路教委調査)

一、常世の屋敷跡は上野野の舟木にあり前中下の屋敷があつて附近動塚という常世の古墳がある。(上毛及上毛人)

一、常世歿後その子常行から国常に至る五代の間は代々佐野屋敷に居住していた。(上毛及上毛人)

本書資料に関係ある文書

- 木曾名所図絵、捨葉抄、続本朝通鑑、和名抄、史鑑、東海木曾両道中懐宝図鑑、増鏡、草まくら、吾妻鏡、水鏡、人国記、太平記、万葉集、柳多留、北国紀行、武家評林、風土記前上野志、大人名辞典、世界人物辞典、帝国人名辞典、日本百科大辞典、姓氏家系辞書、日本歴史辞典、南畝叢書、謡曲辞典、謡曲大観、名作謡曲新釈、大人名事典、資料日本史、日本史、越中志徴、三州志、下新川郡史稿、西徳寺縁起、三州志来因概覧、肯構泉録、越中史料晚起泉達録、日本案内記、富山タイムス、北日本新聞、桜井庄と佐野源左衛門尉常世史跡と

- 三本柿について、田原族譜、唐沢山神社創建誌、ホト、ギス、高崎市史、高崎案内、高崎大観、高崎市の名勝旧跡、高崎市勢要覧、群馬案内、群馬県群馬郡誌、群馬県史、上州路伝説篇、上毛裏かえ史、上州―風と人、上野国志、上毛及上毛人、勝地群馬、上毛俗話、かみつけより群馬、佐野市勢要覧、葛生町勢発達史、郷土史研究の手引、上毛国風土記、高崎志、河北郡誌、加賀志徴、加賀河北の史的文化と地的景観、葛生町教育委員会調査書、森本町教育委員会調査書、上信日記、和漢三才図絵、群馬の史蹟名勝、綱ざこ、平治物語、義経記、堀川百首等

編集後記

佐野源左衛門常世について、仮空説が相当根強く唱えられている一方、口碑では実在を伝えている。この疑問を解くため従来も史家が、それ／＼の立場から相当研究を続けていたものであったがその終止符がつけられず、誰はそのまま現代に伝えられて、古武士のその美しい精神のみがたゞえられていくのみである。

七百余年をさかのぼる出来ごとが、果して真実なもの

賜 貞明皇后陛下御嘉納・和洋御菓子司
——鉢の木・三箇の莊・本舗——

七 富 久 石川久貞

高崎市赤坂町73 電話 6001 5980番 振替東京52479番

◀ 県民が安心して利用出来る ▶

群 馬 銀 行 高 崎 支 店

高崎市田町 高崎支金庫

◀ 子供銀行や一般貯金も御利用下さい ▶

高 崎 信 用 金 庫

高崎市田町 電話(代)3201番

諸 建 築 請 負

井上工業株式会社

社長 井上 房 一 郎

であろうか、それとも単なる戯作であろうかを極めるため、多数の文献からひろいあげた記録をこゝに編集し、今後、更に常世を研究しようとする人のために寄与したいと念願した。

従つて決定版とはならず、疑問を残したまゝ、世の史家の判定を待つことになつたのは、物足りない感もあるがたゞ佐野源左衛門が実在の人であつたことだけは、断定出来るものがあり、要は『鉢木』の事実が中心となつているので、その事が立証出来ないでは意味をもたない。この点については、世の史家の研究にゆだね、ばならないので、この調査につき私見をさけてありのまゝを編集にとつめた。

黒部市教育委員会、葛生町教育委員会、森本町教育委員会、姫路市教育委員会、唐沢山神社佐野宮司、佐野源左衛門の遺品を所持する小林家等から沢山の資料を頂いて、非常に参考となつた。就中、森田喜代太郎調査による「桜井庄と佐野源左衛門尉常世史跡三本柿について」のものは殆どこれを取り入れ、出来るだけ原文のまゝをのせるようにした、こゝに厚く感謝している。尙文中現存している人々の敬称をすべて省略したことをお許し願いたい。(編集者記)

昭和三十二年三月二十日印刷
昭和三十二年三月三十日発行 【非売品】

発行人 中 沢 宗 弥

編集人 根 岸 省 三

印刷所 高崎市通町 吉本印刷株式会社

電話三九八六番

発行所 高崎市教育委員会

パルプ・板紙・洋紙
高崎製紙株式会社

取締役社長 黒崎義平

高崎市八島町192
営業所 東京都千代田区神田淡路町2/7
工場 高崎・日光・千住

牧歌的で美しい

神津牧場 バンガローとキャンプの
準備あり 御利用下さい

上信電気鉄道株式会社

高崎より下仁田間電車・下仁田—神津間バス

高崎映画館組合

東 東 オリ 電 銀 メ 松 ピカ
映 宝 オン 気 星 ト カ
座 座 館 座 口 竹 デ
リ

(イロハ順)

御宿泊に・御集會に・御商談に

～ぜひ御利用下さいませ～

(料金は御予算により)
御相談に応じます

大広間(舞台付百畳敷)
各室共見晴し絶佳
浴場・娯楽室完備
烏川河畔(国道18号線)



高松莊

高崎市高松町

TEL (3965)
(3308)

書籍・雑誌・教科書・参考書

各出版物等は市内の書店を御利用下さい。

高崎書籍小売商業組合

新菓『船橋』近日発売

高崎土産名菓商標登録中

天満屋菓子店

高崎市鞆町 電話6254番

登録商標 (御菓子司)

＝ 厚生大臣賞其他各賞受賞 ＝

名菓 鉢の木石 本舗

みやげ屋

高崎市あら町

電話 2201 番

●●● 学校や団体の御旅行に

乗心地のよい●●●

馬観光バス 群

社長 小林儀緑

高崎市柳川町 (高崎城跡柳橋脇)

電話 5005 番

登録商標 (商標) 小林製菓

名 鉢の本 本 舖
菓 聖 行

みやげ屋

… 学校や団体の旅行に
乗心地のよい…

群馬観光バス

群馬 北上 小林製菓
電話 3205



高崎市立図書館
☎ (027) 322-7919



11716671-0